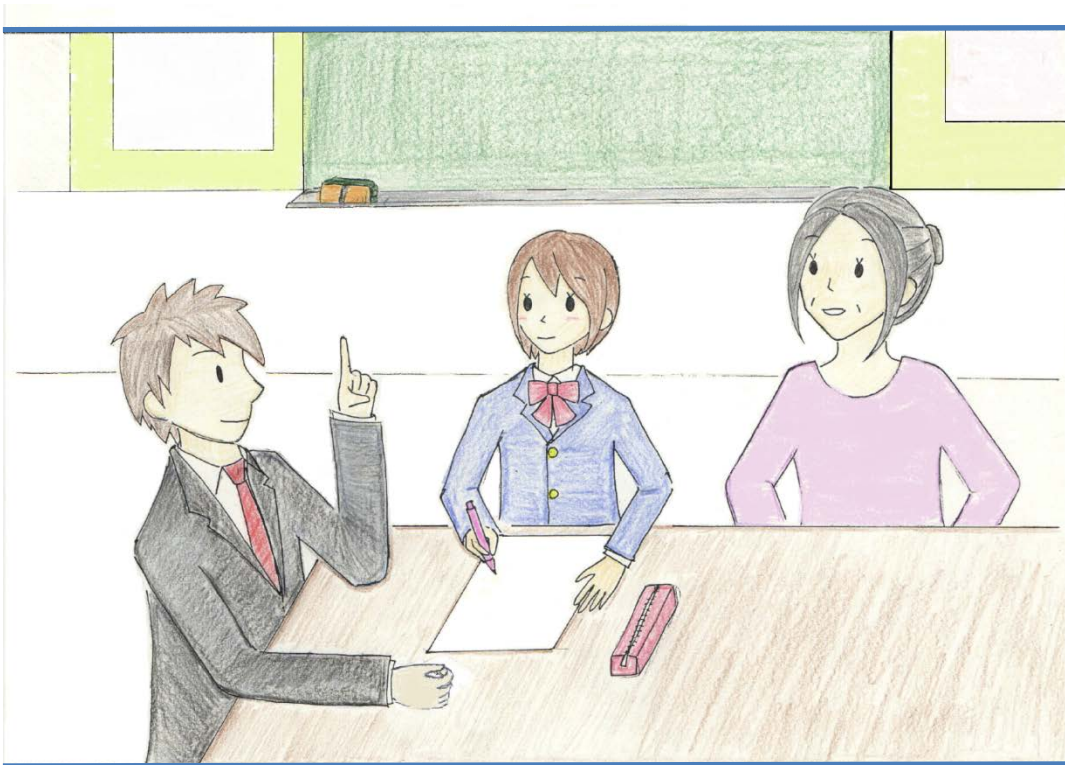


平成 26・27 年度研究

個別教育計画を活用した指導の充実に関する研究

個別教育計画活用ケースブック



神奈川県立総合教育センター

はじめに

共生社会の形成に向けて、障害者の権利に関する条約に基づいたインクルーシブ教育システムの構築が進められる中、障害のある子どもの自立と社会参加を目指し、一人ひとりの教育的ニーズに応じた指導の充実が求められています。

「個別教育計画」は障害のある子どもたち一人ひとりの適切な指導、支援につながる有用なものであり、インクルーシブな学校づくりに向けた取組が進む中、今後ますますその活用を図ることが大切です。

県内の特別支援学校においては、学習指導要領に個別の指導計画の作成が義務付けられる以前から個別教育計画を作成し、個々の教育的ニーズに応じた指導の充実に努めてきました。しかしながら、これまでの実践の蓄積から効果的な取組が工夫されている一方で、個別教育計画が授業に十分に結び付いていない等うまく活用されていない現状もあります。

これらのことを踏まえて、神奈川県立総合教育センターでは平成 26 年度から 27 年度の 2 年間にわたり、県立特別支援学校 4 校の協力のもと「個別教育計画を活用した指導の充実に関する研究」に取り組み、個別教育計画作成・活用上の課題を明らかにするとともに、その要因を探り、個別教育計画を活用するためのポイントや手立てを検討しました。

本ケースブックは、この調査研究の研究成果を広く普及し、個別教育計画を活用した指導の充実に寄与することを目的として作成したものです。「個別教育計画」の作成・活用が「分からない」「難しい」と感じている若手教員の方のガイドとして、また、地域の小・中学校又は高等学校の支援が必要な子どもへの個別教育計画作成・活用の際にご活用いただき、指導の充実につなげていただければ幸いです。

平成 28 年 7 月

神奈川県立総合教育センター

所長 北村 公一

目 次

はじめに

目次

本冊子の目的と構成

第 1 章 「個別教育計画」の基本的な考え方

- Q 1 「個別教育計画」とは何ですか？ . . . 1
- Q 2 「個別教育計画」を作成する上で必要な項目は何ですか？ . . . 3
- Q 3 「個別教育計画」の実態把握で大切な視点は何か？ . . . 5
- Q 4 「個別教育計画」の指導目標を設定する際の大切な視点は何か？ . . . 7
- Q 5 「個別教育計画」の指導内容を選定する際の大切な視点は何か？ . . . 9
- Q 6 「個別の支援計画」を「個別教育計画」にどのようにつなげていけばよいですか？ . . . 11
- Q 7 「個別教育計画」の作成に時間がかかってしまいます。効率化を図るにはどうしたらよいですか？ . . . 13

第 2 章 「個別教育計画」を活用していくために

- Q 1 「個別教育計画」はどのように活用することが大切ですか？ . . . 15
- Q 2 「個別教育計画」を活用していく際の大切なポイントは何ですか？ . . . 17
- Q 3 「個別教育計画」を授業で活用していくためにはどうしたらよいですか？ . . . 19
- Q 4 「個別教育計画」を評価し、見直しや修正にいかすためにはどうしたらよいですか？ . . . 21
- Q 5 「個別教育計画」を活用して教員間の連携を図っていくためには、どのような工夫がありますか？ . . . 23
- Q 6 「個別教育計画」を活用して保護者との連携を図っていくためには、どのような工夫がありますか？ . . . 25
- Q 7 「個別教育計画」を活用して本人の主体的な学びを支える（本人参加）ためには、どのような工夫がありますか？ . . . 27
- Q 8 「個別教育計画」を指導体制や教育課程の見直しに活用していくためには、どのような工夫がありますか？ . . . 31

第 3 章 資料編

個別教育計画活用状況調査回答結果

- I 個別教育計画作成について
- II 個別教育計画活用について

本冊子の目的と構成

(ケースブック活用に当たって)

一人ひとりの子どもの教育的ニーズに応じたきめ細かな指導や支援を行うために、「個別教育計画」は作成・運用されています。一方で、「授業への活用に至っていない」「活用方法が分からない」ことが課題としてあがっています。本ケースブックは、その課題解決に資することを目的として作成しました。

また、初めて特別支援教育に携わる初任者や転任者等の分からなさ、難しさへの支援として、本研究を通して明らかになった「個別教育計画」作成・活用上の課題及び、その中で聞かれた教員からの問いに回答する形で、基本的な考え方や活用に向けたポイント、具体的な事例を示しました。

第1章 「個別教育計画」の基本的な考え方

「個別教育計画とは？」「作成する時の大切な視点は？」等、基本的な内容をQ&A形式で記載しました。

第2章 「個別教育計画」を活用していくために

「活用の際のポイントは？」「活用に向けた工夫点は？」等、活用をテーマに作成しました。ケース事例も紹介しています。

第3章 資料編

本研究を進めるに当たり、県立特別支援学校にアンケート調査を実施しました。その調査結果を、資料として巻末に掲載しました。

なお、本ケースブックは、神奈川県立総合教育センターのホームページからダウンロードできますので、どうぞ御活用ください。

第1章 「個別教育計画」の基本的な考え方

Q 1 「個別教育計画」とは何ですか？



先生方の声

- 「個別教育計画」を何のために作成するのか分からない。
- 「個別の指導計画」や「個別の教育支援計画」との違いが分からない。

「個別の指導計画」とは

平成 11 年の学習指導要領の改訂に際し、盲・聾・養護学校における自立活動と重複障害者の指導にあたって作成が義務付けられた指導計画です。

また、平成 21 年の改訂にあたっては、障害の重度・重複化・多様化に対応し、子どもたち一人ひとりの実態に即した指導を一層推進するため、各教科等にわたる「個別の指導計画」を作成することが示されています。

A. 「個別教育計画」は子どもたち一人ひとりの指導目標及び指導内容を明確にしたものです。

神奈川県では、子どもたち一人ひとりの障害の状態や発達段階等の的確な実態把握に基づき、教育的ニーズに応じた指導目標及び指導内容を設定し、継続的、発展的な指導を一貫して行うための計画を「個別教育計画」としています。

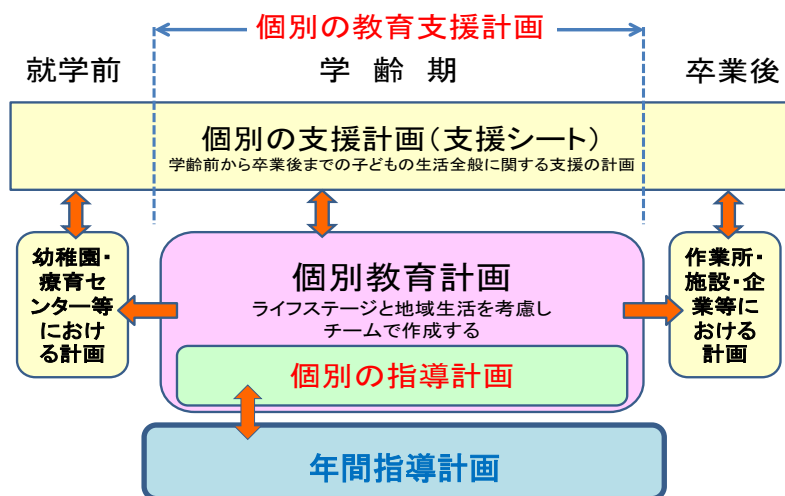
特別支援学校に在籍する全ての子どもたち一人ひとりに、学校生活や学習における目標、手立て等を具体的に示します。

A. 「個別教育計画」は「個別の指導計画」の内容を含みます。

「個別の指導計画」の作成が義務付けられる以前より、神奈川県では「個別教育計画」を作成してきました。「個別教育計画」は、自立活動だけでなく、教科指導も含めた、学校における教育活動全般にわたって作成されるものであり、「個別の指導計画」の内容を含んだ計画です。子どもたち一人ひとりの障害の状態や発達段階等の実態に即して作成されるとともに、ライフステージや地域生活を考慮して作成します。

「個別教育計画」は作成することが目的ではなく、障害のある子どもたち一人ひとりの指導の充実にいかすことが大切です。そのために、「個別教育計画」は作成して終わりではなく、日常の指導の中で適宜評価を行い、実態の捉え直しや指導内容・方法の改善を図り、より効果的な指導につなげていくことが必要です。

A. 「個別教育計画」「個別の指導計画」「個別の支援計画」は関連しています。



まず「個別の支援計画（支援シート）」で、生活全般に関しての支援計画を作成し、次にその計画を踏まえて、「個別教育計画」で学校における教育の計画を作成します。

また「個別教育計画」を作成する際は、各学校の教育課程を踏まえることが必要であり、各教科の年間指導計画等の授業計画との関連を考えて作成します。

A. 「個別教育計画」はチームで作成します。

「個別教育計画」は、三つの方法と二つの視点をもって作成します。

【方法】

- ①チームによる見立てとアセスメントの活用
- ②チームによる目標・計画の設定
- ③計画—実践—評価—改善のサイクル

【視点】

- ①地域生活を考慮する
- ②ライフステージを見据える

担任だけで抱えるのではなく、子どもに関わるチーム(養護教諭や専門職等も含む)での作成が望まれます。

保護者もチームのメンバーであり、作成段階で保護者の意向を取り入れて同意を得ていくことが必要です。また、「個別教育計画」は障害のある子どもの指導の充実を図る上で欠くことのできないものであり、本人の願いや思いを十分聞き取る等、本人の参画を図る視点も重要です。

「個別の支援計画」とは

障害のある子どもが生活していく上で必要な支援を、教育、保健、福祉、医療、労働等の各機関が連携協力して策定するものです。

神奈川では「支援シート」と呼びます。

「個別の教育支援計画」とは

「個別の支援計画」の中の学齢期の部分を指す呼び方です。

それぞれの計画が持つ役割

「個別教育計画」や「個別の支援計画（支援シート）」等は、名称は似ていますが、それぞれの作成目的は異なります。目的・意義を踏まえて、相互の関連性を図ることが大切です。

それぞれの内容・機能を理解し、重複している部分を整理することで、スムーズに作成することができます。

Q 2 「個別教育計画」を作成する上で必要な項目は何ですか？



先生方の声

- なぜ、学校によって書式が異なるのか分からない。
- 「個別教育計画」に必要な項目・内容が分からない。

学習指導要領では

特別支援学校学習指導要領によると、指導計画作成に当たっては、実態把握に基づき、長期的及び短期的な観点から指導目標を設定し、それらを達成するために必要な指導内容を段階的に取り上げることが示されています。あわせて、子どもの学習状況や結果を適切に評価し、指導計画や指導の改善にいかすよう努めることが求められています。

教育課程とは

学校の教育目標に向け、子どもたちに何を教え、何を学ばせるか、教えるべき教育内容を選択し、総合的に組織した学校の教育計画です。

A. 書式は学校や学部ごとに工夫されています。

「個別教育計画」は、各学校の教育課程を踏まえて作成する必要があることから県内での統一書式はなく、学校や学部ごとに教育課程に合わせた書式を使用しています。

学部間をつなぎ、系統性のある指導をねらい、全学部統一書式を使用する学校も増えています。

各学校の書式例として、キャリア発達の視点から学校で育てたい力を四つ程度挙げ、その項目に沿って指導目標・内容等の計画を設定する学校もあれば、生活面・身体面・社会性・学習面等の領域に沿って計画する学校もあります。

また、実態把握の項目に子どもの現在の様子だけでなく、「本人の願い・保護者の願い・目指す姿」等を記入する欄がある書式もあります。

「個別教育計画」について作成の手引きで共通理解を図っている学校もあります。学校の書式について、分からないことがあれば教務担当の教員や学部長等、周囲の人に聞いてみましょう。各学校の書式の意味合いを押さえて作成していくことが必要です。

書式の違いはありますが、必要な項目と一定の手順を踏まえて作成することが大切です。

A. 必要な項目は、主に次の4点があげられます。

- ①実態把握
- ②長期目標・短期目標
- ③指導計画・内容
- ④評価

①実態把握に含まれる内容

行動観察 = 子どもの今の姿

子どもの情報（これまでの記録、医療・福祉の情報等）

面接や、面談（本人・保護者の考え等）

検査数値 = 客観的な数値

②長期目標・短期目標

実態を整理し、以下の点を踏まえて設定

- 1. 必要性
- 2. 適時性
- 3. 達成可能性

③指導計画・内容

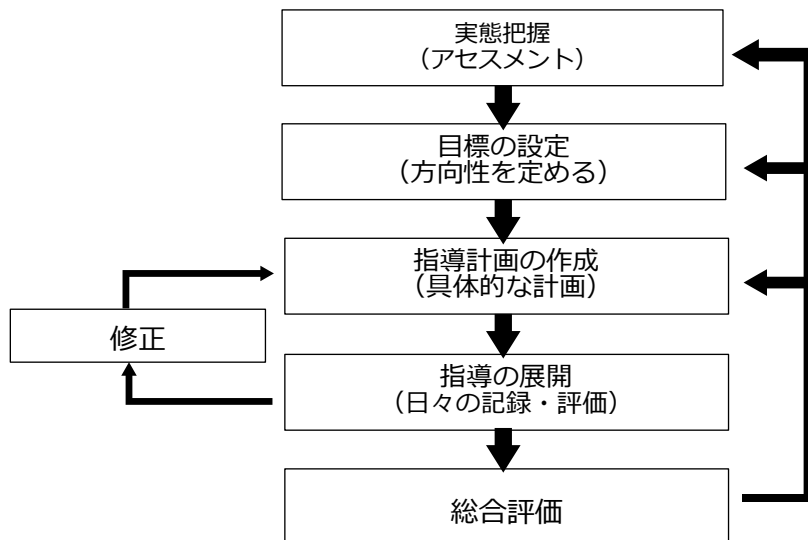
目標をどの場面で指導するのか ⇒ 年間指導計画とのつながり

指導場面と手立ての明確化

④評価

目標や達成度の適切な評価

A. 一定の手順に沿って作成します。



子どもの現在の状態（課題や習得しているスキル）、子どもや保護者のニーズ等、様々な角度から実態把握を行います。その結果から、目標についての方向性を定め、その目標を達成するための具体的な計画を練ります。その後、実際に子どもを前にした指導に入り、日々の指導の中で評価しながら修正を加え、完成させます。最終的には、学期や年度ごとに評価し、変化や到達度、課題は何かを明らかにします。この評価までが次の学期や学年の実態把握資料へとつながっていきます。

長期目標・短期目標とは

長期目標は、1年間程度、短期目標は半期又は1学期程度の目標です。

学校によっては、長期目標を重点目標とし、子どもの全体像から1年間の指導で特に大切な課題を絞って設定しています。

書式は異っていても

「何をどのように記載するか」が大切です。

- ・「何を」
→必要な項目を
- ・「どう書くのか」
→一定の手順を踏まえ

期間の中で達成できそうな内容を整理し、精選して記入します。

記載された内容が、教員間で共通理解しやすく、保護者や本人が分かりやすい内容となるよう吟味して作成しましょう。

Q 3 「個別教育計画」の実態把握で大切な視点は何か？



先生方の声

- 実態把握をする時の視点が分からない。
- 教員間での見立てのズレをどうしたらよいか分からない。
- 必要な情報を収集し（実態把握）それらを分析、考察して教育目標や内容、支援の手立てを設定することが難しい。

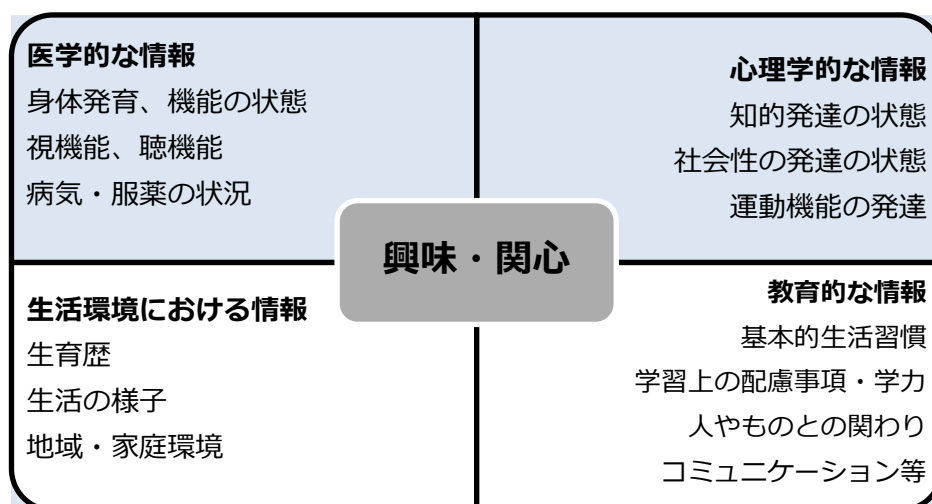
実態把握では

視力・聴力の検査や身体測定や体力測定の結果も実態把握の一部です。

自立活動教諭（専門職）の活用

県立特別支援学校には、自立活動教諭として、看護師の他、PT（理学療法士）、OT（作業療法士）、ST（言語聴覚士）、心理職の4職種が県内の6ブロックに分かれ、各ブロックごとにチームとして配置されています。校内や地区の専門職を積極的に活用し、より専門的なアセスメントにつなげましょう。

A. まずは、子どもの得意なところと苦手な部分を捉えます。

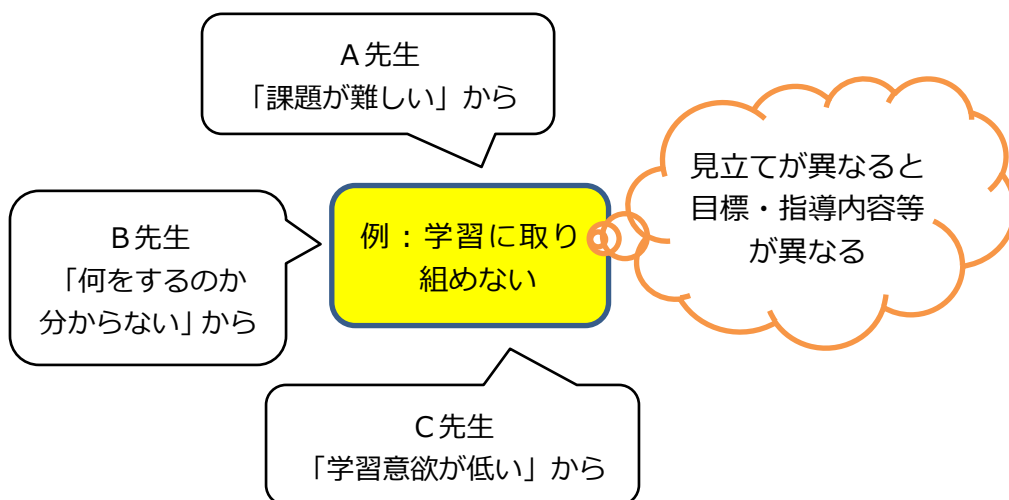


A. 的確なアセスメントが「個別教育計画」作成の基本です。

ここでの「アセスメント」とは「効果的に教育活動を進めるために必要な基礎的情報を収集し、それらを分析、考察して、教育目標や内容、支援の手立て等を構想することです。子どもがこれまでの生活の中でどのような体験をし、成長してきたかを知ることが重要です。内容は生育歴や療育歴、医療や福祉機関との関わり等、子どもによって異なります。方法は、「個別教育計画」「個別の支援計画（支援シート）」等の引継資料や、保護者や前任者からの聞き取り等があります。行動観察では、子どもの発言や行動を日々観察し、事実を記録します。記録を基に、その行動（発言や表出）がなぜ起こったのか、要因を検討することが目標設定と手立てにつながります。さらに必要に応じて校内の自立活動教諭（専門職）に観察を依頼することもできます。

A. 複数の教員で子どもの情報を出し合い、整理します。 多様な視点で子どもたちの状態像を捉え、整理・分析 の経過が見立てにつながります。

複数の教員で指導を行うことが多い特別支援学校では、日常的な共通理解と連携が重要です。個々の教員の経験や知識の違いによる多様な視点での意見交換から実態把握や目標設定のヒントが得られることもあります。子どもの課題の捉えが異なることは当然のことで、なぜそう考えたか、何を根拠に分析したのかを話し合うことが重要です。



A. 子どもの現在と将来の生活の視点を踏まえた「個別教育 計画」を作成することが大切です。

保護者から家庭生活や地域生活の状況を聞いてみましょう。現在の課題や様子から、今育てたい力が明確になるかもしれません。子どもの将来像について一緒に話し合ってみることも大切です。

<学校の実践例から>

標準化された検査には、学校現場で簡便に使用できるものもあります。『太田のステージ』『NCプログラム』等は知的障害教育部門で多く利用されています。肢体不自由教育部門では『学習到達度チェックリスト』『学習習得状況把握表GSH』等が用いられています。他にも新版S-M社会生活能力検査や『MEPA-II R』（ムーブメント教育・療育プログラム）等があります。周囲の教員に相談してみましょう。

標準化された発達 検査等には

WISC-IVや
K-ABC、ビネ
ー式等の認知発達
の状態を測定する
ものの以外に、社
会性や視知覚等の
検査等様々です。

アセスメントにゴ ールはない?!

子どもは日々成長し、変化していきます。そのため継続したアセスメントが必要です。年度当初のアセスメントと継続的なアセスメントの意味合いは異なりますが、実態に合わせた授業づくりにつながることに変わりはありません。

Q4 「個別教育計画」の指導目標を設定する際の大切な視点は何ですか？

目標設定の際は

「こんなことがしたい、こうなりたい」という本人の思いや願いが反映されていることや、その思いをどう育てていくのかという支援の観点が含まれていることが重要です。

「豊かな生活」や「自立」とは？

身の回りのこと全てを自分で行い、職業生活を送ることが「自立」ではありません。他者の援助を受けながらも、自分らしい人生を送ることが本人にとっての「豊かな生活」や「自立」につながります。そのため今、身に付ける力を考え、目標を設定します。



先生方の声

- 指導目標が多くなってしまふ。
- 優先順位が分からない。
- 長期目標と短期目標をどのように設定したらよいのか分からない。
- 将来の姿や生活を見据えた指導目標を設定することが難しい。

A. 子どもの視点に立って設定することが大切です。

実態把握で得られた情報を整理し、チームの教員で大まかな目標（長期目標）の方向性を決めます。目標は学習の過程について言及するのではなく、一連の学習を終えた段階で予測される成果・結果について考え、子どもの目指す姿をイメージします。

A. 優先順位は本人のニーズや生活年齢、日常生活の様子から考えましょう。

ポイントは次の5点です。

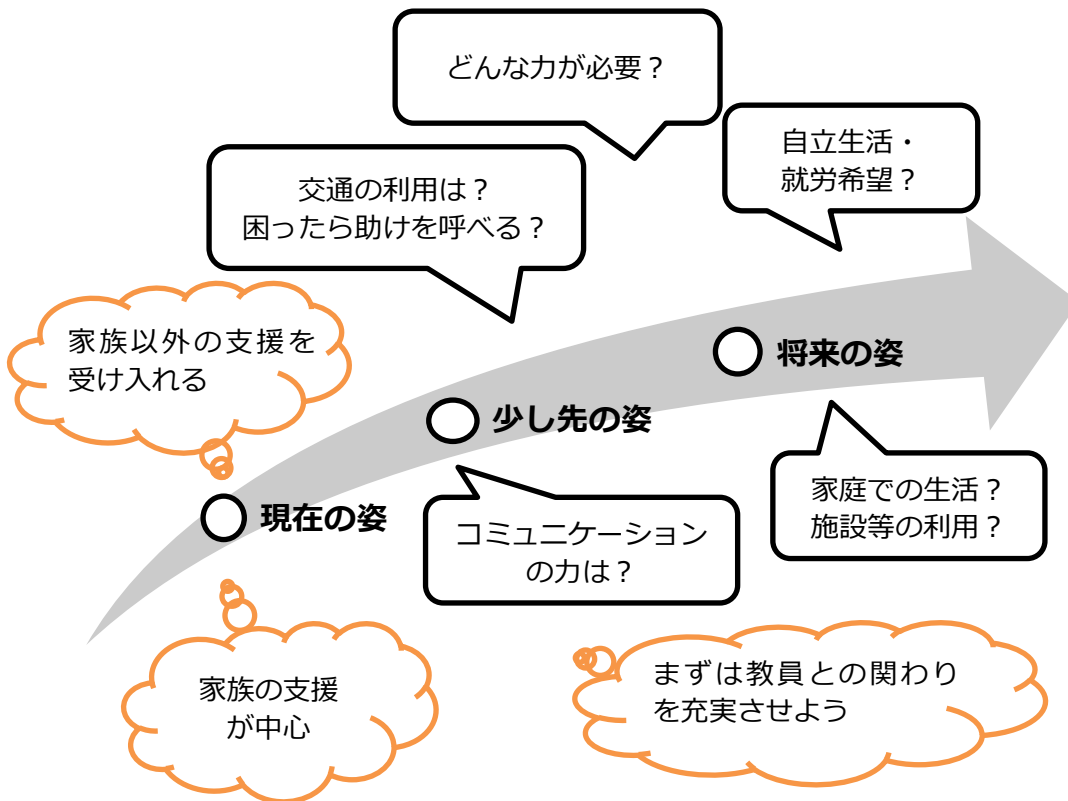
- ①子ども本人と家族のニーズを考慮する
- ②日常生活・社会自立を考慮する
- ③他の教科や場面との関連性を考慮する
- ④次につながる目標を設定する
- ⑤目標について本人や保護者、周囲の教員と話し合う

A. 子どもの豊かな生活や将来像をイメージし、今、必要な力や育てたい力を考えます。

保護者の願いや生活環境を踏まえ、子どもの全体像を捉えます。1年後の姿を思い描き、長期目標を設定します。その力を各授業場面でどのように育んでいくか、半年後や数か月後をイメージしながら具体的な短期目標を設定します。多くの目標を設定せずに、重点を持たせたり、精選したりする視点が大切です。

A. まずは現在の家庭や地域生活の様子から、少し先の姿を考えてみましょう。

小学部低学年の子どもたちの高等部卒業後の姿をイメージすることが難しい場合は、現在利用しているサービスの状況や家庭での手伝い等の様子を聞き取ることから始めましょう。将来像を考えるきっかけになることがあるかもしれません。各年齢段階で将来の生活に必要な基本行動は何かを考えます。また、進路支援担当教員や高等部の教員に、進路先や卒業後の生活について、話を聞いてみましょう。地域支援や進路担当の教員は、地域の社会資源や福祉サービス等に関する情報を多く持っていると思われます。



将来を視野に入れた基本行動

- ①生活面：生活リズムの確立、身辺自立等
- ②社会スキル：挨拶、返事、社会的マナーや他者との関わり等
- ③態度：意欲、自分の役割や「働く」意味の理解等

障害の有無や程度に関係なく、誰にとっても社会生活に必要なものです。

Q 5 「個別教育計画」の指導内容を 選定する際の大切な視点は何ですか？



先生方の声

- 各ライフステージや学部間等のつながりを踏まえた指導内容の選定が難しい。
- 目先の課題に捉われてしまう。
- 取り組むべき指導内容が分からない。

意欲を育む指導の 難しさ

社会生活・職業生活に必要な力を身に付ける指導方法は多くあります。指導により知識や技能を身に付けても「やってみよう」という意欲が育まれていなければ、「生きる力」につながりません。得意分野や興味・関心をいかし、意欲を育む学習内容を設定することが大切です。

現在の姿から将来 像をイメージする こと

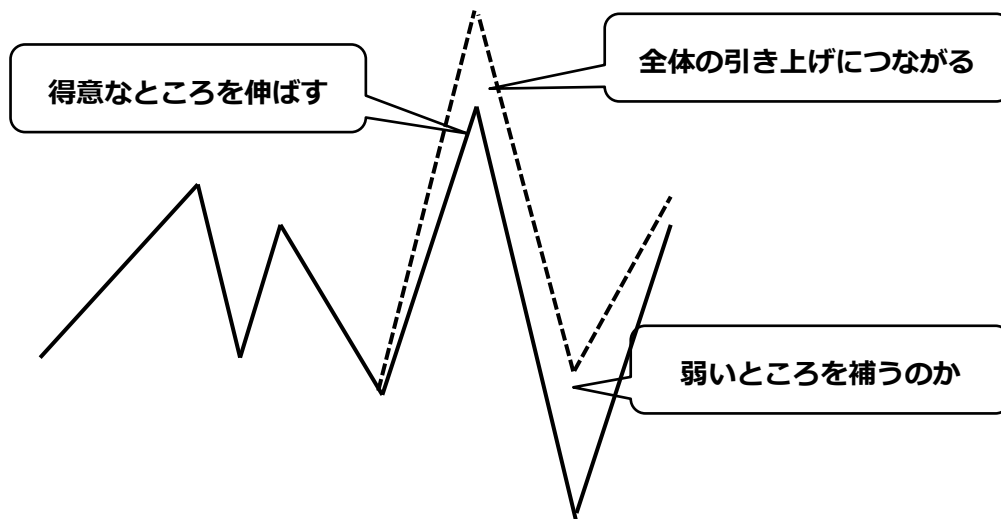
子どもたち一人ひとりの障害の状態や経験、将来の生活課題等に基づく指導内容を設定し、子ども自身が見通しを持って学習活動に参加できるようにしましょう。

A. 現在の課題を達成することと、将来の生活へのつながり を考えてみましょう。

将来の生活像をイメージすることが難しい場合は、家庭生活や地域生活の様子から必要な力を考えてみてもよいでしょう。課題の順序性や系統性から今行うべき内容を考えることも重要です。

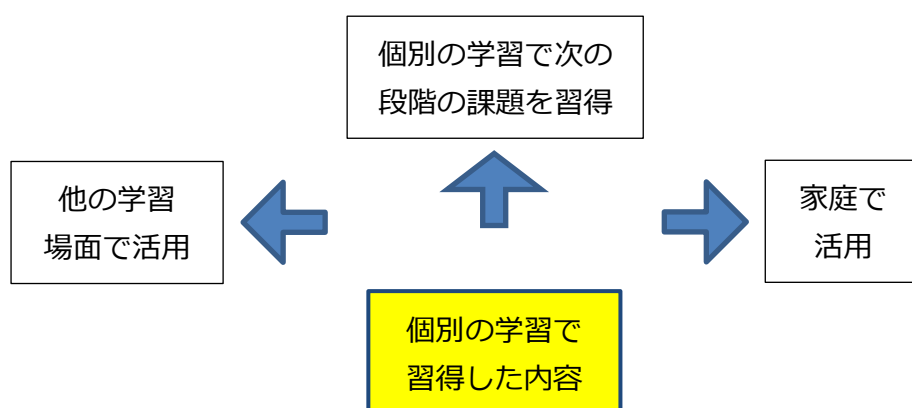
A. 子どもの課題面にばかり捉われず、強みや得意なことを いかした学習内容を考えましょう。

苦手なこと・困難なことを補うだけでなく、強みをいかしながら弱さを補っていく指導や支援が大切です。子どもの興味・関心や得意な力を十分に発揮できる学習が課題の解決に向かうこともあるでしょう。苦手な課題に取り組ませることの繰り返しは意欲の低下にもつながりかねません。



A. 子どもの生活の質が向上するために必要な力は何かを考えてみましょう。

現在子ども自身が発揮している力は他の学習場面や他の支援者と一緒に活動する場面でも発揮できるのか、環境が整わなければ難しいのか、周囲の教員や保護者と話し合ってみましょう。



生活の質の向上には、積み上げていく視点と広げていく視点が必要です。生活年齢や発達段階に応じて、今行うべき指導内容の精選を行いましょう。

生活に結び付く具体的な活動を学習活動の中心に据えるとともに、より実的な状況下での指導を充実させるため、学校生活全般の見直しと再構築を行います。特に行事の精選や日課の見直し、学習環境の構造化等により、学校生活を子どもたちにとって分かりやすいものに組み立て直すことが重要です。興味・関心を大切にしながら多様な経験を通じて生活の質の向上を図ることや、成功体験の積み重ねの中で子どもたちが自発的に学習に取り組むよう促していくことも重要です。一人ひとりに集団及び社会の中で役割を果たすことの充実感を十分に味わわせ、自尊感情を高めることに配慮しましょう。

<学校の実践例から>

E 特別支援学校^{*}分教室では、「マイゴール」として生徒自身の目標をシートにして1週間の取組を振り返っています。このような取組を行うことで、生徒自身が「なぜ、取り組まなければいけないのか」「自己の強みと弱みに気付く」「未来への目標を見いだす」等の成長が見られました。また、シートにすることで、生徒と教員で目標と学習過程のすり合わせの材料にもなり、関連する学習内容の精選にもつながります。

^{*}学校名のアルファベットは、平成 27 年度研究集録第 35 集と連動しています。そちらもあわせて御覧ください。

指導内容の精選

高等部や分教室では、限られた期間で社会に送り出すために何が必要か、指導内容を精選する必要があります。キャリア教育の視点が叫ばれて久しいですが、「働くこと」だけではなく、「働き続けるために」の視点が重要です。

他学部の学習内容について知る

特別支援学校には、複数の学部・部門を設置している学校が多くあります。校内の他学部・他部門の授業内容を参観することも、生活年齢や発達段階、障害種に応じた指導内容の参考になります。

Q6 「個別の支援計画」を「個別教育計画」に どのようにつなげていけばよいですか？



先生方の声

- 「個別の支援計画」を作成しているが、「個別教育計画」とうまくつながっていない。
- つなげ方が分からない。

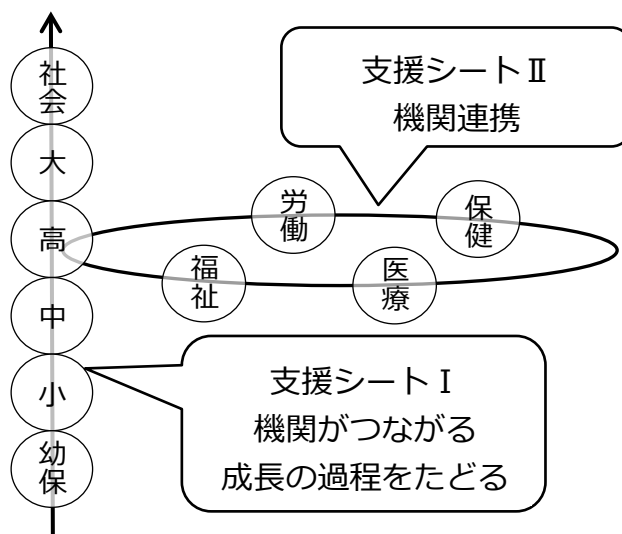
「支援シートⅠ」 とは

各場面において「これまでの取組」「これまでの取組の評価」「これからの計画」について記入するものです。

「支援シートⅡ」 とは

所属機関と他機関の役割分担と支援内容を記入するものです。

A. 「個別の支援計画」は、継続的な支援を行うために各機関をつなぐためのツールです。

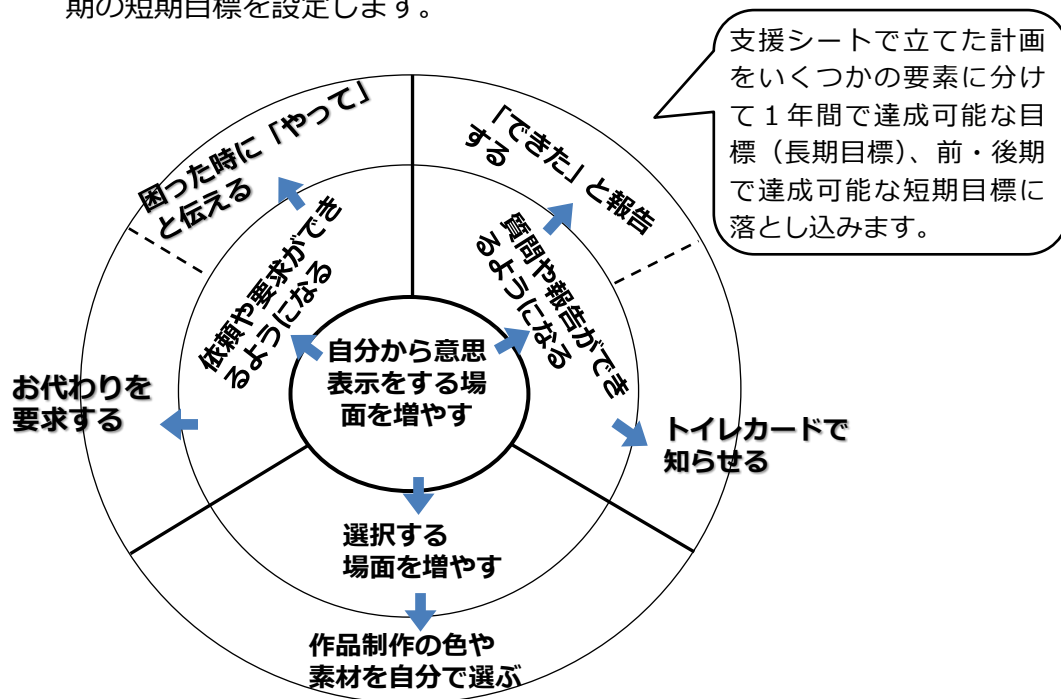


A. 「個別の支援計画（「支援シートⅠ・Ⅱ」等）」の内容を踏まえて「個別教育計画」を作成していくことが大切です。

支援シートⅠで立てられた生活全体の計画に沿って、支援シートⅡの各関係機関で役割分担を行い、それらを基に学校における教育を計画していくことが大切です。

A. 支援シートで立てた計画をスモールステップに分けて「個別教育計画」を作成します。

支援シート I は成長の節目である3年のサイクルを目安に作成します。それまでの取組の評価等を参考にこれからの計画を作成します。その計画を達成するために「個別教育計画」では1年間で達成できる長期目標や前期・後期の短期目標を設定します。



支援シート作成の目安

支援シートは3年のサイクルを目安に作成しますが、支援の状況に応じて適宜、修正していくことが大切です。

発達の状況や状態の変化等をしっかり捉え、1年で作り直すということも考えられます。支援シートの変更に伴い、「個別教育計画」の目標も見直し、状況に応じたものに変えていきましょう。

A. 学校の教育活動の充実のためには、支援シートの活用を図り、地域のネットワークの構築が大切です。

「個別の支援計画」は、子どもたち一人ひとりの生活全体を支える計画です。子どもたちの生活は、家庭生活、学校生活、地域生活があり、これらは相互に関連しています。それぞれの生活を充実させるには、関係者・機関のネットワークが大切です。学校生活を充実させるうえで、まずは家庭生活や地域生活を充実させていくことが必要なこともあります。家庭での一日の様子、どんな機関とつながっているのか等、保護者から情報を得、必要により支援会議等を開いて地域資源の開拓をしていくことも必要です。

<学校の実践例から>

「個別の支援計画（支援シート）」を踏まえて「個別教育計画」が作成できるよう、「個別の支援計画（支援シート）」のこれからの学校の取組の項目について、「個別教育計画」の書式欄に反映できるように書式を工夫している取組があります。

Q7 「個別教育計画」の作成に時間がかかってしまいます。効率化を図るにはどうしたらよいですか？

個別教育計画作成における効率化

「個別教育計画」は子どもたち一人ひとりの実態に即して、自立や社会参加に向けて必要な指導目標や指導内容・手立てを明確にしたものです。

作成に当たっては、関わる教員や保護者、本人で話し合いを行い、共通理解を図ることが必要です。

指導の充実につながるよう丁寧に話し合いを重ね作成する視点は大切ですが、一方で作成することに時間がかかり、共通理解までに至らないのでは本末転倒です。

必要な情報を分かりやすく簡便に記述する視点も大切です。



先生方の声

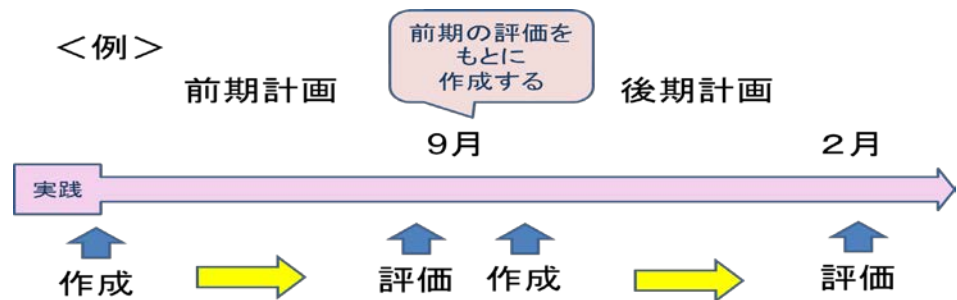
- 「個別教育計画」作成の基礎的な知識やスキルが身に付いていないと作成に時間がかかる。
- 作成することに時間がかかり、授業場面での検討が十分に行われていない。

A. 計画的に話し合い日の設定や役割分担等を行いましょ

前期の評価をしたら前期が終了ではありません。子どもの成長、私たちの実践は継続しています。前期の評価と後期の指導は継続して考え、目標や指導計画を考えます。

「前期の目標は達成できましたか？」指導内容や手立て、前期の評価を基に、後期の目標や指導内容を検討しましょう。

後期の評価や年間の評価は、次年度の前期の目標や指導内容につなげていきましょう。



A. 計画—実践—評価—改善の個別教育計画のシステムの中で、既存のツールを関連付けて活用していきましょう。

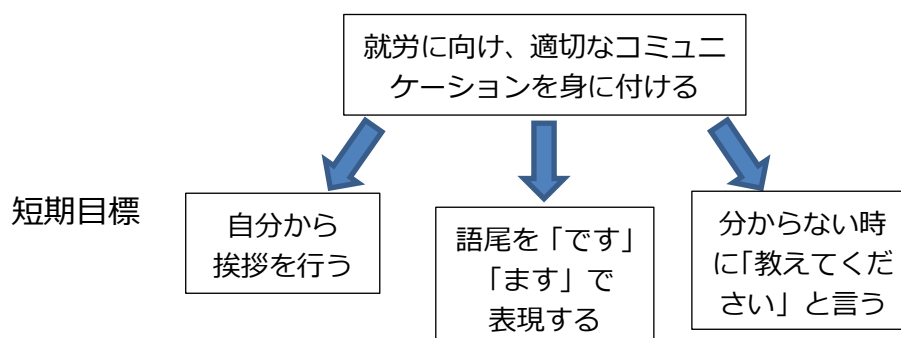
個別教育計画作成に際しては、各ツールを関連させ、活用することが大切です。それにより、支援の一貫性や作業の効率化が期待できます。

作成の流れ	活用が予想されるツール
実態把握	健康診断の記録、連絡帳、面談の記録、アセスメント記録、個別教育計画（前年度、前期など）
目標設定	支援シート I、個別教育計画（前年度、前期、実態把握表）
具体的な手立て	年間指導計画、日々の実践の評価

A. 長期目標と短期目標との位置付けを明確にし、系統的な目標立てを行いましょ。

長期目標は、1年くらいのスパンで立てる目標です。長期目標をいきなり詳細に立てることは難しいことです。そのため、長期目標は「大まかな方向性を定める」という位置付けで立てましょう。その上で、短期目標は長期目標をより具体化したものを、端的に表して立てましょう。

例) 長期目標



このように、大まかな目標から、少しずつ具体的な目標に絞っていくと目標も立てやすくなります。また、その際、目標は必ず評価ができるような内容にしましょう。

評価につながる目標設定

授業者や参観者、誰が見ても個々の児童・生徒の目標が明確であれば、的確な評価にもつながります。そのために具体的な目標の設定が重要です。

「～を楽しむ」では、いつ、何を、どのように楽しむかが分からず、主観的な評価になりがちです。「登場人物が出てくると教員に目を向けて笑う」等、学ぶ姿を想定できる目標設定を心がけましょう。

第2章

「個別教育計画」を活用していくために

Q 1 「個別教育計画」はどのように活用することが大切ですか？



先生方の声

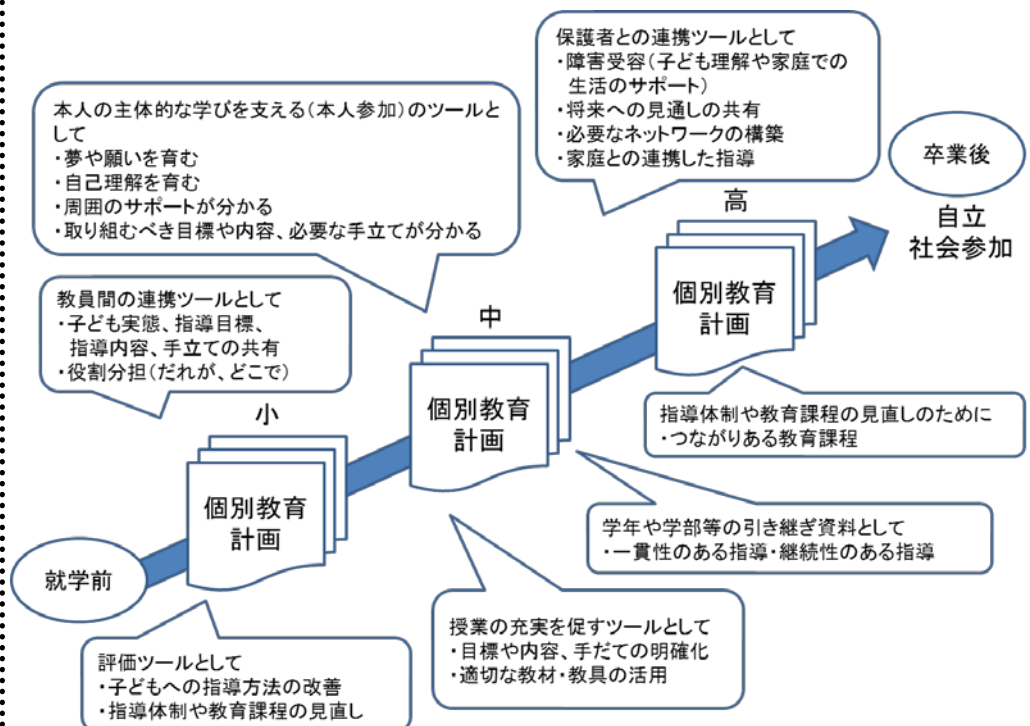
○「個別教育計画」は作成しているが、十分な活用にはつながっていない。
○どのように活用したらいいのかわからない。

個々に応じたレシピ

特別支援学校では、子どものニーズに対応したオーダーメイドの指導内容を設定することが重要になります。しかし、経験の少ない先生にとっては「何をすればよいか分からない」につながりかねません。「個別教育計画」はその児童・生徒に提供する指導内容を明確にしたレシピと考えることもできます。

A. 授業や指導の基となるものです。教員間・保護者との連携のツールになります。

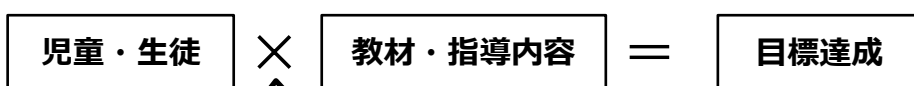
<個別教育計画活用のイメージ図>



A. 「個別教育計画」を活用して「Aさんが有意義な生活を送るにはどうしたらいいのか」に関わる人たちで考えていきましょう。

「個別教育計画」は作るためだけの計画でも評価するためだけの計画でもありません。「生き生きとした自分らしい充実した生活を送るために」何が大切か、一緒に考えていくことでそれぞれの役割が明確になります。その過程を通して、児童・生徒の現在の姿と目指す将来の姿がはっきりしてくるでしょう。

「個別教育計画」は今までの学習履歴や学習の経過を知るための重要な資料です。年度末の多忙な中で引き継ぎ資料を作成し、4月には新しい児童・生徒の実態把握をしながら指導を行います。過去の「個別教育計画」を見れば分かることも多くあります。どのようなことが目標として設定されていたか、どのような学習を行ったか、手立ては、結果は。新年度にその指導内容を行ってみることから始めてみましょう。「担任が変わると一から同じことを繰り返し、実態把握に時間が費やされ、目標達成のための指導につながらない」といったことは少なくなるはず。引き継いだ教員が同じ教材で、同じ手立てで指導しても同じ結果が得られるとは限りません。その違いはどこから生じるのか、どうすれば人や場面に般化するのかを考えることが大切です。



手立て・環境

将来の生活に必要な
合理的配慮は何か
将来の生活のイメージは

結果の分析が大切

「個別教育計画」を学習内容のレシピと考えると、同じ材料で同じように行ったから、同じ結果が得られるというわけにはいかないことが分かります。大切なことは、なぜ結果が異なったかを明確にすることです。

周囲の教員や保護者から情報を得てその違いを見極めることが、個人に適した「合理的配慮」を考えるきっかけにもつながります。

Q 2 「個別教育計画」を活用していく際の大切なポイントは何ですか？

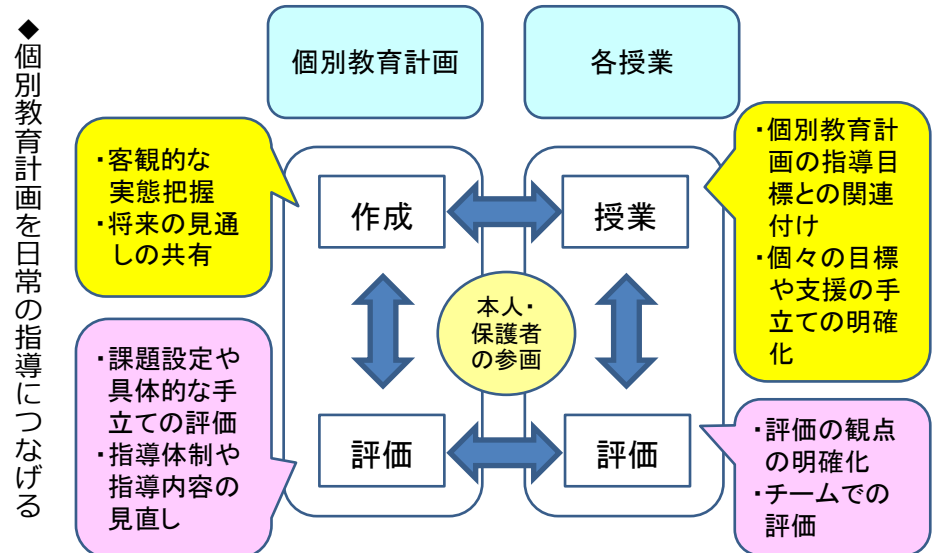


先生方の声

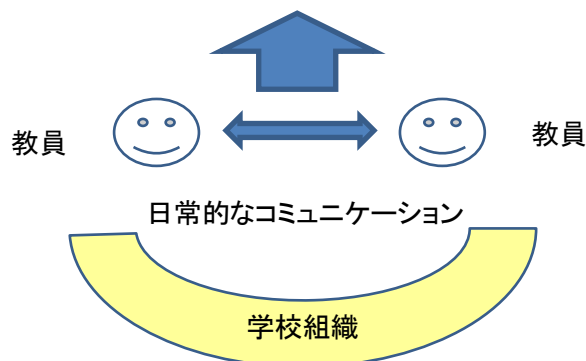
〇活用していく上で大切になるポイントが分からない。

A. 活用を図ることで様々な効果が得られます。

<活用のポイント図>



◆個別教育計画の活用を組織で支える仕組み



- ・計画的な時間設定、効果的な会議の持ち方
- ・専門職等の活用
- ・計画から授業へつなげる手続きの明確化
- ・学部間のつながりの明確化（教育課程）
- ・個別教育計画作成や教育課程についての研修

言葉や文字にする大切さ

子どもの実態や指導の手立て等は、慣れてくると頭の中で整理するだけで行うことが可能かもしれませんが、その取組を言葉によって整理したり、文字に起こしたりすることは一手間かかることでしょうか。しかし、今の取組を他の教員や本人、保護者と共有し、的確な指導として継続するためには大切な作業となります。

A. ポイントとして次の点が挙げられます。

- ① 日常の指導の中で目標、評価、授業改善を意識して取り組む仕組みづくり
- ② 「個別教育計画」の活用を組織で支える仕組みづくり
- ③ 本人や保護者の参画の重要性

A. 様々な効果が期待されます。

組織としての授業改善につながる

目指す将来の姿が明確になり、指導・支援の見通しが持てる

学年・学部間のつながりが分かる

<活用を組織で支える仕組み>

「個別教育計画」の作成・評価に多くの時間が費やされるため、活用にまで力が回らないということがあるのではないのでしょうか。「個別教育計画」の授業での活用と教員間の連携に、学校全体で取り組んでいる例を紹介します。

D 特別支援学校[※]では、作成時、評価時のほかに「個別教育計画」の見直し日を年間6回設定しました。「見直し日」には、学年やクラス単位で「指導目標と授業での様子は見合っていたのか」「X先生と活動した時は〇〇だったけど、Y先生とはどうだったのか」「他の場面ではどのように指導しようか」等の検討が行われています。時には担任以外の教員（総括教諭や専門職等）も参加して、話し合いが行われます。日々の業務に追われ、じっくりと児童・生徒のことを話し合う時間を持つことが難しい中でも、はじめから日程に組み込まれていることで担任以外の教員へ参加を呼び掛けやすくなります。新1年生については、複数の教員の見直しへの参加や、学年を越えた集団学習における打合せを行う等、運用の仕方によって活用はさらに深まります。

[※]学校名のアルファベットは、平成27年度研究集録第35集と連動しています。そちらもあわせて御覧ください。

作成と活用

目の前の子どもに対して、どんな目標を立てたらよいのでしょうか。初めて会った子どもの計画を短期間で作成することは難しいですね。そんな時は！昨年までの「個別教育計画」を見直してみましょう。

これまでの取組を踏まえて、次の目標を考えることで、子どもの学びの積み重ねにつながります。

Q3 「個別教育計画」を授業で活用していくためにはどうしたらよいですか？



先生方の声

- 「個別教育計画」で設定した指導目標(長期・短期等)や内容が日々の授業に結び付かない。
- 集団の目標や内容ありきになってしまう。

A. 「個別教育計画」で設定した指導目標(長期・短期目標)を日ごろの授業や指導場面と関連付け、具体的な指導目標を設定することが大切です。

「個別教育計画」は目標や指導内容、手立てなどを作成したら、おしまいではありません。計画した内容を意識して、授業一コマでの目標を考えたり、指導を行ったりすることで「個別教育計画」がいきます。

そのために、授業や指導に関わる教員全員で、個々の子どもの目標や手立てを共有し、意識して実践することが大切です。

授業で活用する工夫のポイント

教員間の
共通理解

授業内容との
すり合わせ

目標や手立て
の視覚化

チームでの共有

一人で指導をするわけではありません。チームで連携して指導するためにも、「個別教育計画」を基に情報共有を行い、授業や指導・支援を考えましょう。

A. 読み合わせの時間を設定し、「個別教育計画」をチームで共有しましょう。

「個別教育計画」を、担任間で分担して作成する場合でも、複数の教員で作成する場合でも、作成後に読み合わせを行いましょう。

読み合わせは、誤字脱字のチェックや内容のチェックではありません。一人ひとりの子どもの実態・目標・指導内容等を共通理解し、また指導方針を検討、確認することで、授業や生活場面での一貫した指導につながります。

A. 授業内容を考える際に、「個別教育計画」とすり合わせ ましょう。

年間指導計画や授業内容を考える際は、児童・生徒一人ひとりの「個別教育計画」の目標を意識しながら考えます。

また集団授業を行う際は、「個別教育計画」に掲げた一人ひとりの目標から、授業における個々の目標を設定します。事前にチームで共有しておくことで、ねらいに沿った学びを提供することができます。

A. 集団での授業では、事前の打合せがポイントです。

限られた勤務時間の中で、新たな時間を捻出するのは至難の技です。しかし、「時間がないから」とあきらめていては、良い授業につながりません。

例えば、①打合せのための時間設定を行う(例：15分で)

②ポイント(例：授業のねらい)を共有する等

効率的な打合せを心がけましょう。個別のねらいを共有する方法として、サブティーチャーによる指導略案への補足記述や、オン・ザ・フライミーティングを行い、教員間で共有する時間を設けることが大切です。

A. 「個別教育計画」の目標と手立てを授業の中で実践して いくことが大切です。

メインティーチャーが授業を構想したら授業担当者同士での共有が大切です。そのために、個々の児童・生徒の目標や手立てを視覚化すると取り組みやすくなります。指導略案(裏面)に「個別教育計画」の目標や本時の目標と手立て、また取組の評価や次回への振り返り等を記入できる欄があると、その時間の指導が明確化されます。記録としても残るので、授業改善や評価にも活用できます。

個別教育計画を授業で活用することで

指導の目標や手立てがより明確になります

適切な指導内容や教材・教具の活用につながります

<学校の実践例から>

○個別教育計画の目標を授業へつなげるために

C特別支援学校[※]では、個々の児童・生徒の個別教育計画の目標と授業の目標を関連付けるフレームを指導略案の裏へ示すことで、指導目標から評価までの流れを明確にしようとしていました。視覚化することで、チームでの共有を目指すとともに授業改善の手立てとしてしました。

[※]学校名のアルファベットは、平成27年度研究集録第35集と連動しています。そちらもあわせて御覧ください。

TTの連携

授業においてはメインティーチャー(MT)と、サブティーチャー(ST)の連携は欠かせません。日頃からお互いの意見を言い合い、聞き合える関係を築くことで、より良い授業づくり、授業改善につながります。

Q4 「個別教育計画」を評価し、見直しや修正にいかすためにはどうしたらよいですか？



先生方の声

- 課題設定や具体的な手立てが記載されておらず、支援の方法の評価をしていない。
- 評価の視点が曖昧で、次の指導に向けた改善につながらない。

評価を適切に行うために

目標設定と指導内容、具体的な手立ての設定が重要です。

A. まずは評価の視点をおさえましょう。

「個別教育計画」で設定した指導目標と指導内容に対して評価をします。

- ・指導目標はどのような目標ですか？
- ・指導内容はどのような内容ですか？

達成状況を確認

日々の指導の場面でも意識して指導を行い、日々の評価や振り返りが大切になります。また、適切な指導につながり、「個別教育計画」の評価にもつながります。

A. 次につながる評価をすることが大切です。

評価のポイントは

目標の達成度を
評価する

【子どもに対して】

指導内容や方法を
評価する

【教員の「支援の手立て
や方法」に対して】

両方が必要です

うまくいかなかったことは
「個別教育計画」の目標や内容を見直しましょう
うまく達成できたことは
次のステップの目標や内容につなげましょう

実態と目標が合っていない可能性も

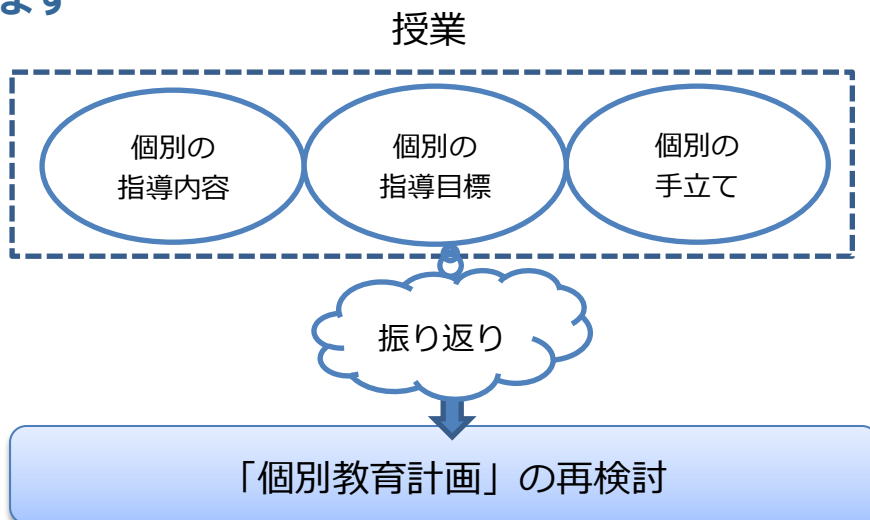
実践がうまくいかない時は、再度計画の内容とすり合わせをしましょう。

個別教育計画は見直しや、修正することが可能です。

「個別教育計画」における学習の評価を、授業改善(指導目標、指導内容、支援の手立ての見直しや、支援体制の検討等)にも活用します。

A. 授業の振り返りが「個別教育計画」の見直しにつながり

ます



日々の授業の振り返りは、「個別教育計画」の評価や見直し、修正にもつながります。授業実践後に個別の「指導目標・指導内容・手立て」を振り返る機会をつくるようにします。この段階で、「個別教育計画」で設定した目標や指導内容とずれを感じた場合は、チームで再検討し、保護者の承諾を得て、「個別教育計画」をより実態に即したものに修正していきます。

A. 「個別教育計画」の評価を、本人や保護者に通知する評価としても活用します。

目標や指導内容に対する評価を、本人や保護者とも共有します。日々の学習の評価(連絡帳や面談でのやり取り等)とも関連させながら、半期ごとや年間の評価を共有します。

また、その取組と評価を基に、次の目標や指導内容に関する意見を聞き取り、次の「個別教育計画」の目標や指導内容の検討につなげましょう。

<学校の実践例から>

○「個別教育計画」の見直し日の設定

年度始めに計画した目標が、児童・生徒の実態に合っているか、個別教育計画の内容を定期的に見直すことで、より実態に合った的確な授業や個に応じた目標設定が行えます。

的確な評価とそれを授業改善につなげる案として、

月に1回、単元ごとに1回 等の見直し日を設定することで

授業を定期的に評価することができました。改善点を見出し、次の授業につなげるため、評価を積み重ねていくことが大切です。

評価から次の目標を

評価は、次の目標や指導内容につながります。評価結果を基に次の目標や指導内容を考えるので、前期と後期の内容が全く同じになることはありません。

組織で支える仕組みづくり

年間計画の中に、個別教育計画の見直し日を適期に位置付ける等、組織的な取組が有効です。

また、クラスで話し合いを行う際に、担任以外のオブザーバー的な役割を持った存在が加わることも視点の広がりや深まりが期待できます。

Q 5 「個別教育計画」を活用して教員間の連携を図っていくためには、どのような工夫がありますか？



先生方の声

- 担当の教員に指導が任される。
- 児童・生徒の実態を共有しにくい。
- 個別教育計画の目標や必要な手立てについて、共通理解が難しい。
- 役割を意識していない。

共有する視点で

検討日が目標や指導内容を読み合わせるだけの時間になっていませんか。複数の教員で実態の捉えを検討し合い、個々のニーズに合った目標になっているか、その妥当性を確かめる場にしましょう。検討する際は、教員間で共有する視点を持ちましょう。

A. 指導に関わる教員で児童・生徒の様子と「個別教育計画」を検討する機会を持ちましょう。

「個別教育計画」の作成に当たり、指導に関わる複数の教員で実態、目標、手立てを検討することが大切です。複数の目で捉えることで実態把握に客観性が生まれ、目標がより具体的に、手立てが明確になります。自分だけでは考えつかなかった手立てや、授業実践につながるアイデア、視点が見つかるはずです。

A. 「個別教育計画」を担当教員のみで作成するのではなく、授業の記録や評価を基に複数の教員で作成しましょう。

評価に客観性を持たせたり、児童・生徒の学びを多角的に理解したりするために、指導に関わった複数の教員で検討することが必要です。児童・生徒の学習状況は教科や場面、関わっている教員によって異なることがあります。その違いが起こる要因を分析していくことで、評価の客観性が高まるだけでなく、児童・生徒が自分の力を「いつでも」「どこでも」発揮できるようにするための工夫が見つかるかもしれません。

A. 相談や進路担当、専門職（PT、OT、ST、心理職）、 や看護師、養護教諭にも意見を聞いてみましょう。

できるだけ学校の専門職の先生に「個別教育計画」の作成に参加してもらいましょう。授業の様子を見てもらったり、教材・教具や支援の助言を受けたりすることで、自立活動を踏まえた授業の実践につながります。医療や健康状態については、看護師や養護教諭の視点も必要です。専門職や支援連携の担当教員の参加が時間的に難しい場合には、個人情報管理に留意し、個別教育計画を閲覧できるようにして、意見やアイデアを聞き取ることができるようにしている学校もあります。

A. 連携を図ると次のような効果が期待されます。

実態、目標、指導内容、手立てを共有して指導にあたることができる

いつ、どこで、だれが指導するのか役割分担が明確になる

評価を複数の目で検討することができる

次の目標や指導の検討につながる

指導や手立てがクラスと学年の児童・生徒の指導にいかされる

<手元の課題に集中することが難しい児童・生徒への支援>

担任の取組と困り感

「衣服の着脱や課題への取組に時間がかかる」

OTによるアセスメントと仮説

「刺激反応への応答性と選択的注意の課題がある。刺激を減らし注目できる教材は？」

授業での実践

「環境や教材を限定し、色や持つ位置の支援で注目しやすい工夫を」

結果

「ジッパーやボタンの取組が容易になり、時間がかかって不機嫌になることが減った」

協働の視点

体調・健康管理には規則正しい生活が大切です。偏食指導や体重管理については、栄養教諭や養護教諭と連携して指導することで、日常的に指導の効果が高まります。

医療ケア等を必要としている児童・生徒はケアを必要とする時間だけでなく一日を通して看護師と情報を共有していくことが不可欠です。

Q6 「個別教育計画」を活用して保護者との連携を図っていくためにはどのような工夫がありますか？



先生方の声

- 保護者の思いを十分に聞き取っていない。
- 実態把握や見立て、将来像のずれがある。
- 日々の授業の取組が十分に伝わっていない。
- 話す機会が少ない、確保しづらい。

ケースに応じた情報収集

様々な事情で親元を離れて生活する児童・生徒の保護者との連絡手段については、入所施設や児童相談所等との連携が欠かせません。家庭状況により、個別の対応が必要な場合もあります。校内での情報共有を密にししながら、外部機関と連携して行いましょう。

A. 保護者から児童・生徒の実態や課題等、必要な情報を丁寧に聞き取ることが必要です。

学校と家庭において児童・生徒の見せる様子が異なる場合は、教員と保護者の間で実態の捉えにずれが生じることもあります。児童・生徒の実態の共有や捉えにずれが生じる要因を確認することが必要です。そのためには、保護者との日常的な情報共有が大切です。引継ぎ資料、地域生活での様子の聞き取り等から、児童・生徒の課題や将来像を共有していきます。

A. 保護者と教員の間で、児童・生徒の将来像について共有し、指導に当たることが大切です。

情報が共有されないまま、各々の指導が異なると、児童・生徒の混乱を招きかねません。将来像のイメージが難しい場合には、少し年長の児童・生徒の様子や卒業した先輩の働く姿を保護者と一緒に見学する機会をつくることも一つの方法です。実際の様子を見ることで、イメージが具体化され、連携のきっかけになるでしょう。育てたい力に向けて、学校、家庭とそれぞれが取り組む役割について話し合うことも大切です。

A. 学級通信や連絡帳での伝達では、写真や教材を提示して分かりやすく伝えましょう。

学校で用いられている専門用語では伝わりづらいことがあるかもしれません。今取り組んでいる課題がどのような力を育てているか、写真や具体物を交えて分かりやすく説明することで、見立てや将来像の共有につながります。また、外国につながるの児童・生徒も増えています。相手の立場に立った情報の提示が重要です。

A. 家庭の状況により、情報共有や連絡手段を工夫しましょう。

家庭の状況によっては、学校からの連絡に即対応することが難しい場合があります。電話や連絡帳では連絡が取りづらい家庭に対しては、メールやFAX等の手段も有効です。用件によっては誤解を生じさせないために、直接話した方がよいこともあります。

A. 連携を図ると次のような効果が期待されます。

家庭においても、課題に対する共通した取組が行える

学校と家庭の両方で指導するため、力の定着と般化が期待される

児童・生徒の成長が目に見えることで保護者の協力がさらに高まる

<連絡帳を活用した取組の事例>

既存の連絡帳の中に、「個別教育計画」の目標2～3項目を目に留まる形ではさむことで、毎日目標を見ながら記入できるようにしました。学校と家庭双方で「個別教育計画」の目標を意識し、目標に関する子どもの姿を連絡帳で共有しました。

また連絡帳でのやり取りの変化を記録することで、評価や次の目標設定にもつながりました。子どもの成長記録にもなり、教員と保護者が様子を常に共有しながら、連携をより深めることができました。

平成27年度長期研究員
研究報告より

(A)さんの目標		月	日	曜日	名前
① コミュニケーションの力をのばす	時間割				持ち物等
	ホームルーム				
② 自分でできることを増やす	給食				
	下校				
③ その他	提出物				
	受取り確認				
		家庭	学校	下校方法	
		から	へ	→	
					(記入:)

家庭とのやり取り

家庭の都合により、教員が自宅や携帯の電話から連絡する必要がある場合は緊急連絡先一覧及び、電話番号やメールアドレスの取扱いに細心の注意を払いましょう。

必ず、管理職の先生と事前に確認し、学校のルールに則って連絡を取り合うようにします。

Q7 「個別教育計画」を活用して本人の主体的な学びを支える（本人参加）ためには、どのような工夫がありますか？



先生方の声

- 児童・生徒の表出の弱さや理解の程度により、本人の思いや願いを把握しづらい。
- 授業での学習目標や評価方法を児童・生徒自身がかかるように知らせていくことが難しい。
- いつ、どこで本人の参画を図ったらよいか分からない。

本人・保護者の参画

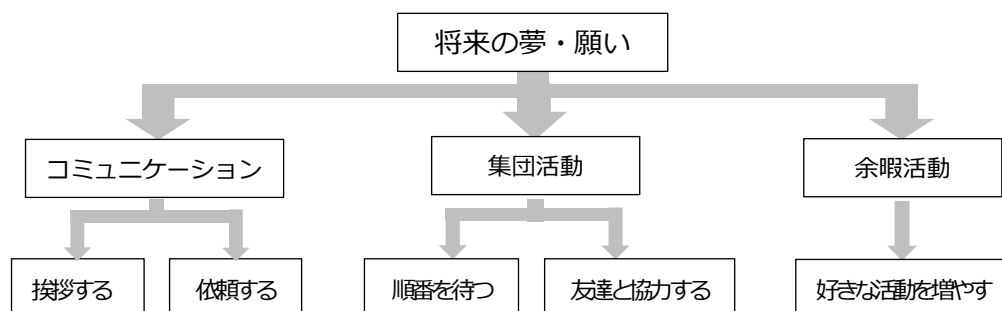
表出の少ない児童・生徒に対しては、実態把握を行う中で、本人の興味・関心や、得意・不得意、将来に必要な力等を見立て、関わる支援者間で共有しましょう。また、個別教育計画作成の際は、主体者である本人及び保護者との合意の上、進めることが重要です。

A. 児童・生徒一人ひとりの「将来の夢」や「願い」等を聴き取り、「個別教育計画」の中に具体的な目標と指導内容を設定します

家庭訪問や面談、進路学習等の機会を通じて、本人及び保護者の「将来の夢」や「願い」を聴き取りましょう。また、表出の弱さや理解に難しさのある児童・生徒に対しては、保護者からの情報や引継ぎ資料を基にチームでの的確な実態把握を行い「自立と社会参加」を見据え、本人の将来像や必要な力を見立てることが重要です。

A. 児童・生徒の「将来の夢」や「願い」を基に、現在の実態と課題を明確にし、「個別教育計画」の目標に反映させることが重要です。

児童・生徒の「将来の夢」や「願い」の聴き取りを基に、これから身に付けていく力として観点ごとに見立て、達成に向け必要な段階や各ステップにおける目標を明確にした上で個別教育計画の目標へと落とし込みます。



A. 児童・生徒本人に「個別教育計画」の内容を知らせることが大切です。

児童・生徒本人の将来の夢や願いの実現のために、何が必要であるかをきちんと理解させ、そのために個別教育計画に立てられた目標がどういう意図であるかを知らせることが重要です。

A. アセスメントツール等を用いて、児童・生徒本人に自己理解を促すことが大切です。

児童・生徒本人に対し、課題を達成するための評価規準や評価の観点も合わせて説明したり、授業の中で達成規準や評価の視点を本人に考えさせたりする場面を取り入れましょう。その際、自己評価を行ったり、教員の評価とすり合わせたりして、自分の強みや弱み、今できていることや課題となることに気付くことが重要です。

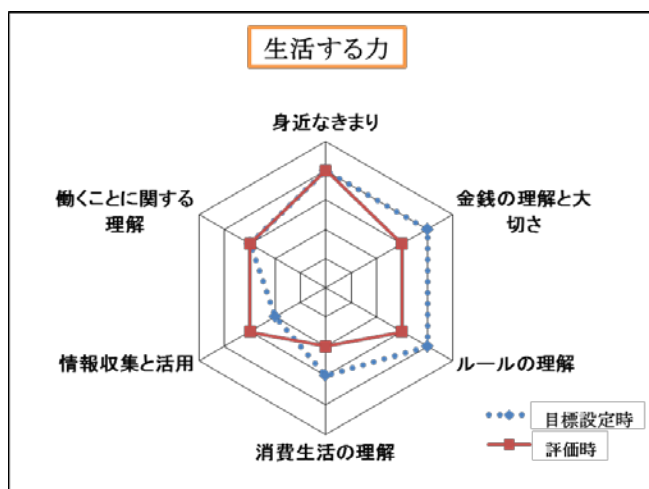
目的に応じた学習場面の設定

自己理解に関する学習は、生徒の実態や学習内容に合わせて一斉授業での実施と、面談等個別で扱う場合と、目的に応じて設定しましょう。

<学校の実践例>

A特別支援学校^{*}分教室では、「人と関わる力」、「将来を考える力」、「生活する力」、「取り組む力」（以下四つの力）を社会生活に必要な力として位置付けています。さらに、四つの力の具体的な内容項目を「育てたい力」として示し、個々の生徒の到達度や課題を明確にするとともに、生徒の実態を把握するための評価基準表を作成、活用しています。対象生徒について、教員各々の見立てのずれを共有していく過程で生徒理解をより進めることができると考えます。

また個々の生徒の評価基準表を基に、表の形（チャート）に落とし込み、生徒や保護者に視覚的に提示し、分かりやすく伝わるよう工夫しています。



評価基準（社会基準評価）から作成したチャート表

組織的なマネジメント

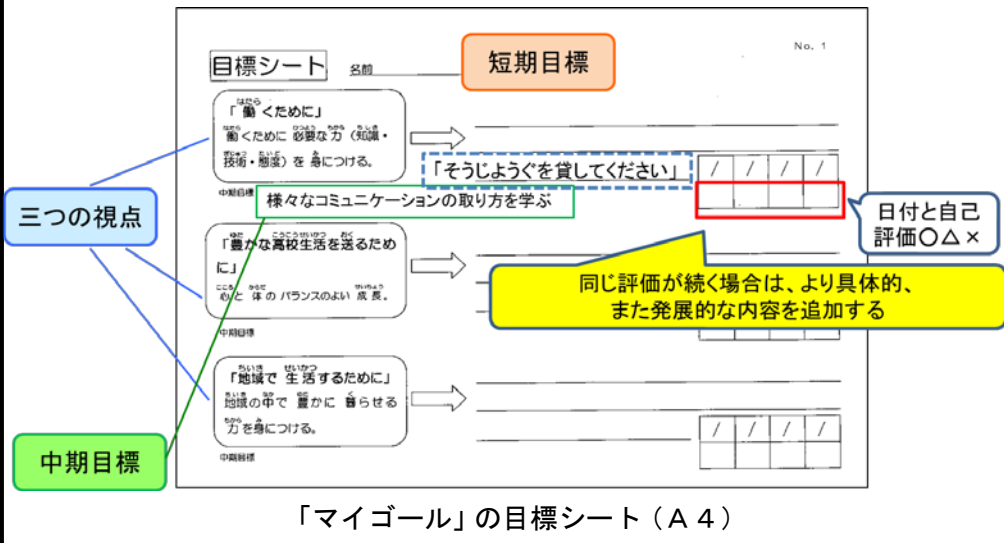
組織を統括する役割を担う総括教諭等が、様々な会議時間を計画的に設定したり、事務作業に関する記録等の簡便化を図ったりすることで、学校全体の業務の効率化を進めることが期待されます。

F 特別支援学校※では、本人との面談の際に、「生徒の聞き取りワークシート」を用いています。「個別教育計画」の様式と同様、四つの力（学ぶ、楽しむ、暮らす、働く）に沿って記入でき、見て分かりやすく、作成にいかしやすい記録として活用しています。

学ぶ	楽しむ	くらす	はたらく
学校で、 勉強したいことはありますか	毎日の生活で、 楽しみなことはありますか	家や近所で、お手伝いなどを していますか (○をつけましょう)	将来、 どんな仕事をしたいですか
		1 そうじ 2 調理 3 せんたく 4 皿洗い 5 その他	(理由)
(理由)	興味のあること やってみたいことはありますか	将来にむけて、 やってみたいことはありますか	働くために、自分に必要なことは ありますか(○をつけましょう)
			1 あいさつ・報告・相談など 2 集中力 3 体力 4 やる気 5 その他
大人になって、どんなことをしたい？ / どんな大人になりたい？		9月から、どのコースで学びたいですか(○をつけましょう)	
		1 自立支援コース 2 就業支援コース 3 わからない	

生徒の聞き取りワークシート

また、E 特別支援学校※分教室では、HR や朝の自立学習（日課表上の呼称）の時間の中で、15分程度「マイゴール」という取組を行っています。教育課程として示されている三つの視点を基に中期目標を立て、それを踏まえて生徒自身が教員とともに短期目標を考えて設定します。週に一度取組を見直す中で、同じ評価が続いた場合は、より具体的（取組範囲を限定する等）、また発展的な内容（他の場面へ拡大する等）を追加しながら、約1か月のサイクルで取組を重ねる実践を行っています。



※学校名のアルファベットは、平成27年度研究集録第35集と連動しています。そちらもあわせて御覧ください。



Q 8 「個別教育計画」を指導体制や教育課程の見直しに活用していくためには、どのような工夫がありますか？

幼少期からの取組

「自立と社会参加」を考えるにあたっては、幼少期からの系統的な取組の視点が重要です。個々の児童・生徒が高等部卒業後に必要となる力を見据えて、「今、身に付けさせたい力」を生活全体から拾い、学習内容に位置づけていく必要があります。

身近な生活の出来事が、将来必要となる力になることを意識しながら、学びの場をつくりましょう。

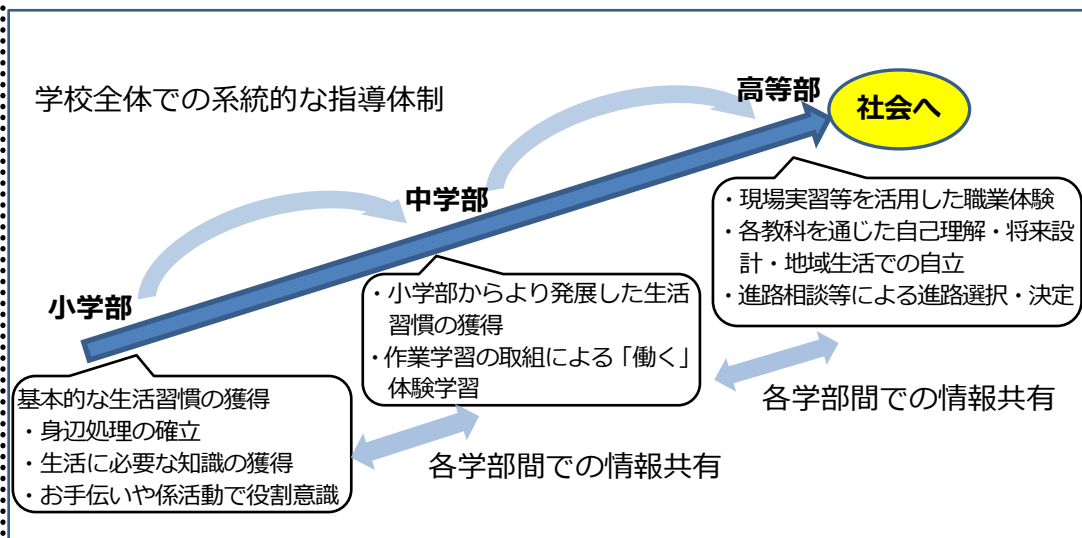


先生方の声

- 学部による教育課程の違いやつながりが分からない。
- 見直し、修正の仕組みが分からない。
- 各教科間のつながりが明確でない。

A. 学部間で相互の教育課程を知り、系統性を意識した教育課程を編成することが大切です。

各学部の教育課程や普段の授業の様子をお互いに知ることが大切です。その際、児童・生徒の「自立と社会参加」を念頭に置き、各学部で積み重ねていくことを共有し、学校全体で系統的な教育活動を進めていくことが重要です。



A. 入学、進級にあたり、それまでの学習とのつながりを意識した「個別教育計画」を作成することが大切です。

「個別の支援計画」や、前年度の「個別教育計画」「アセスメントシート」等を活用し、それまでの積み重ねを踏まえて「個別教育計画」を作成します。

A. 「個別教育計画」は、児童・生徒の実態に合わせて適宜、見直しと修正を行うことが大切です。

「個別教育計画」は、作成したら終わりというものではありません。子どもの状況の変化や時間の経過に伴い、適宜見直しと修正を行います。併せて、指導計画の見直しや、指導体制の見直しも行います。

子どもが目標を達成した時	➡	次の目標を立てる
子どもの目標達成が難しい時	➡	達成可能な目標を立て直す
単元ごとに見直してみる	➡	一つの単元が終わったら見直す
一定期間ごとに見直す	➡	1か月ごと、学期ごと、学期に数回

*実践の中で見直しや修正をした目標に沿って、指導体制や指導内容についても見直しや修正を行っていく。

A. 学校から社会への移行という共通の視点を持って、年間指導計画や「個別教育計画」を作成することが大切です。

学校や学部、学年が目指す児童・生徒像を念頭に置き、「自立と社会参加」に向けて、個々の目標を設定していきます。その目標を達成するために各教科の内容を精選し、必要な手立てを考えていきます。児童・生徒の「自立と社会参加」に向けて必要な力を育てることを目的とした教科指導の在り方が求められます。

<学校の実践例から>

A特別支援学校※分教室では、単元における観点位置付けシートを作成し、各教科の各単元のねらいが「個別教育計画」の項目における各観点のどこに位置付いているかを一覧表にしています。それにより各教科の横のつながりが明確になるでしょう。

※学校名のアルファベットは、平成27年度研究集録第35集と連動しています。そちらもあわせて御覧ください。

教育課程の見直しにもつながります

日ごろの児童・生徒の姿から授業を見直す視点を常に持つことで、教育課程全体へ意識が向くでしょう。見直しや改善の視点を持ち続けることが大切です。

第3章 資料編

個別教育計画活用状況調査回答結果

I 個別教育計画作成について

<内容>

- A 実態把握
- B 指導目標の設定
- C 指導内容の選定
- D その他
 - ・ 個別の支援計画（支援シートI等）との関連付け
 - ・ 個別教育計画作成の効率化

II 個別教育計画活用について

<内容>

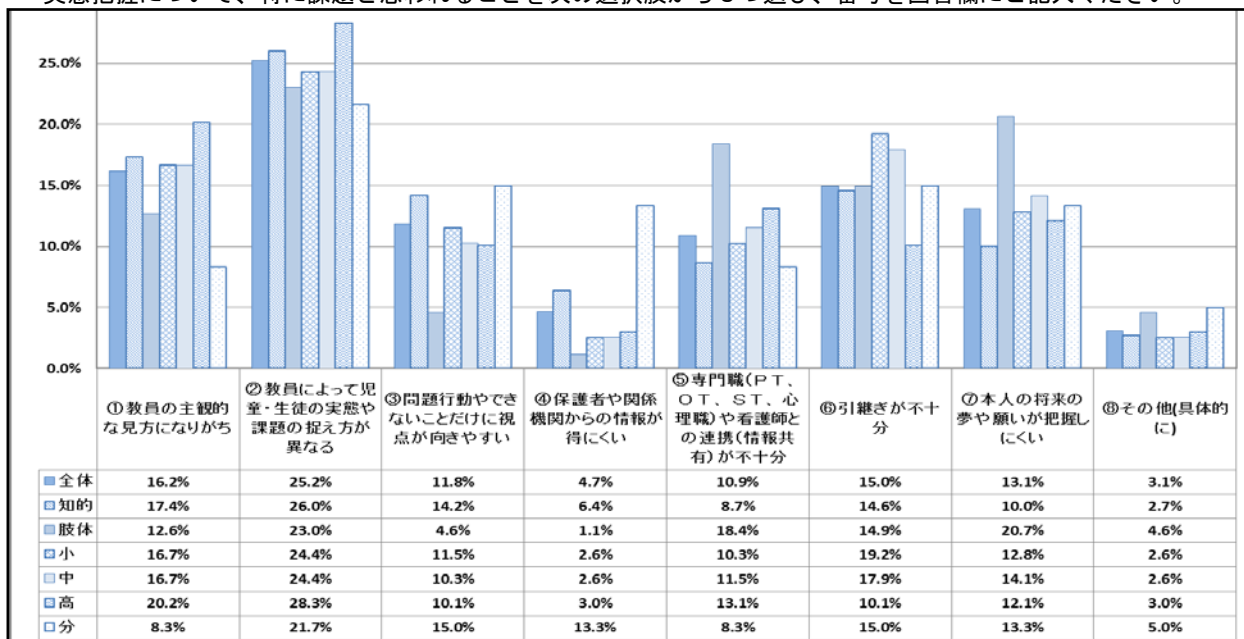
- E 授業での活用
- F 評価の活用
- G 教員間の連携
- H 保護者との連携
- I 本人の参加
- J 教育課程の見直し

I 個別教育計画作成について

A 実態把握

1 実態把握上の課題

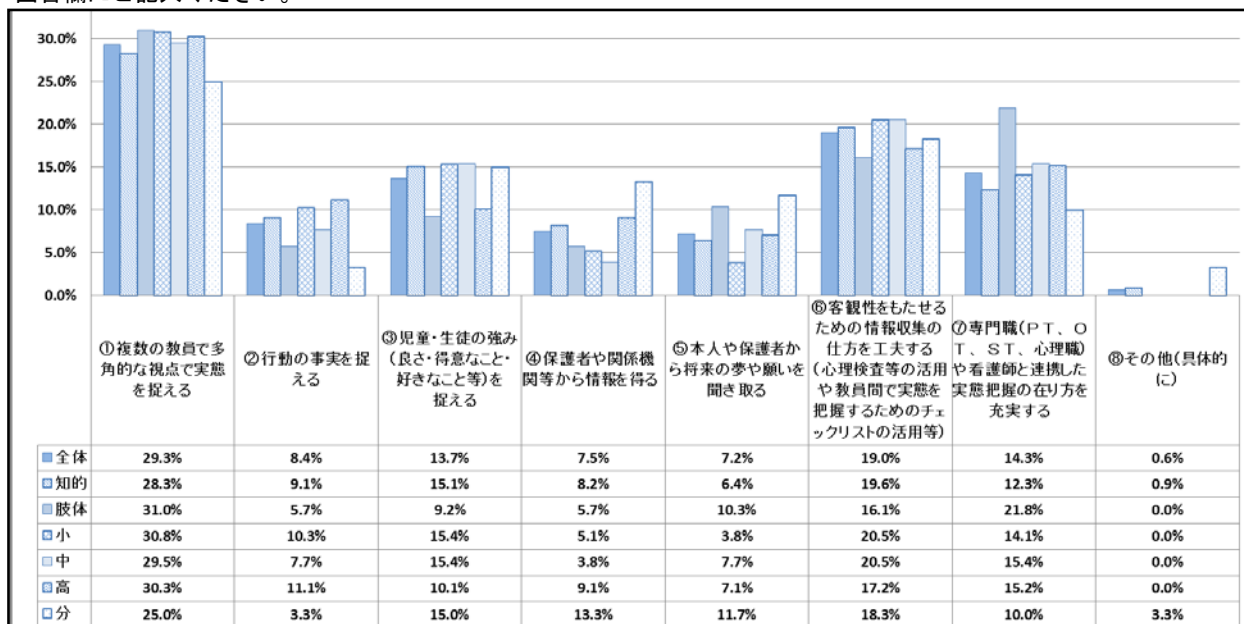
実態把握について、特に課題と思われることを次の選択肢から3つ選び、番号を回答欄にご記入ください。



- ・②「教員によって児童・生徒の実態や課題の捉え方が異なる」への回答が部門、学部問わず一番高い。
- ・知的障害教育部門では、①「教員の主観的な見方になりがち」が2番目に高く、次いで⑥「引き継ぎが不十分」への回答が高い。
- ・肢体不自由教育部門では、⑦「本人の将来の夢や願いが把握しにくい」が2番目に高く、次いで⑤「専門職や看護師との連携が不十分」への回答が高い。
- ・分教室では、②「引き継ぎが不十分」と並んで③「問題行動やできないことだけに視点が向きやすい」が2番目に高く、他学部 비해④「保護者や関係機関からの情報が得にくい」が高い項目として挙げられている。
- ・その他として、「複数の教員間で実態把握を行っていくための情報共有の方法」「時間調整」等の回答があった。

2 課題改善に向けて大切なこと

1で挙げた課題の改善に向けて、実態把握について、特に大切だと考えることを次の選択肢から3つ選び、番号を回答欄にご記入ください。

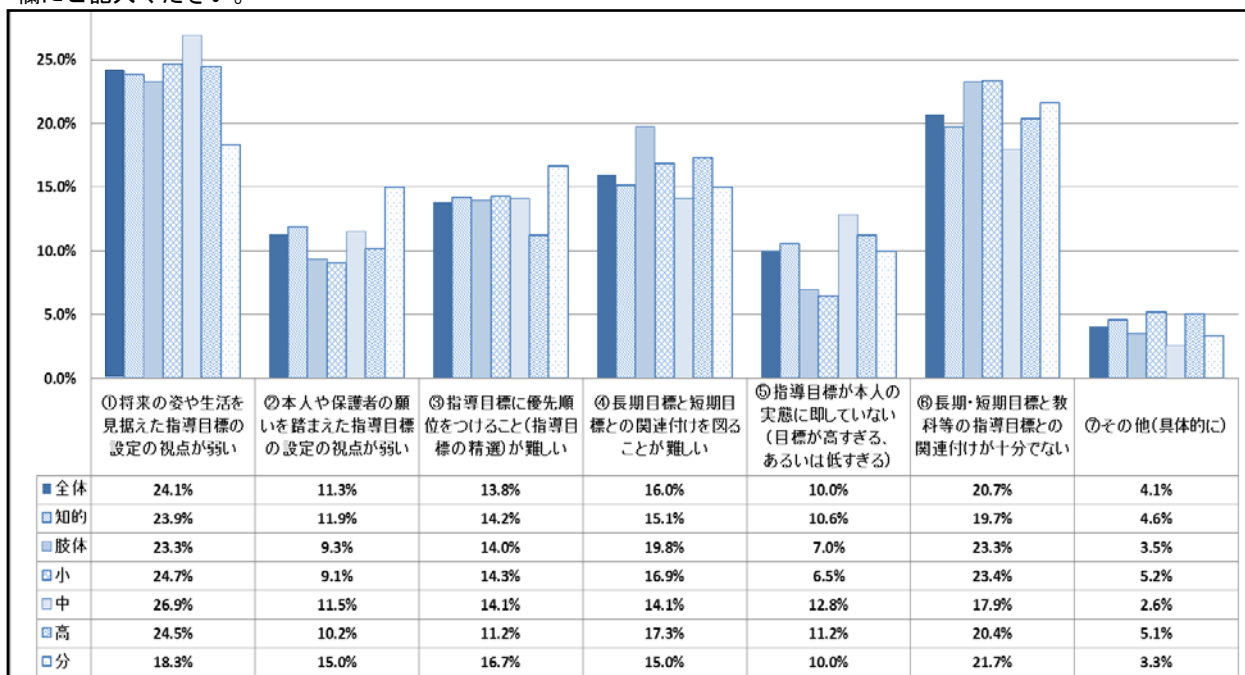


- ・①「複数の教員で多角的な視点で実態を捉える」への回答が部門、学部問わず一番高い。
- ・知的障害教育部門では、⑥「客観性をもたせるための情報収集の仕方を工夫する」が2番目に高く、次いで③「児童・生徒の強みを捉える」の回答が高い。
- ・肢体不自由教育部門では、⑦「専門職や看護師と連携した実態把握の在り方を充実する」が2番目に高く、次いで⑥「客観性をもたせるための情報収集の仕方を工夫する」が高い。
- ・その他として、「就学前の情報の活用」や「実態把握に向けた教員の専門性」の回答があった。

B 指導目標の設定

1 指導目標設定上の課題

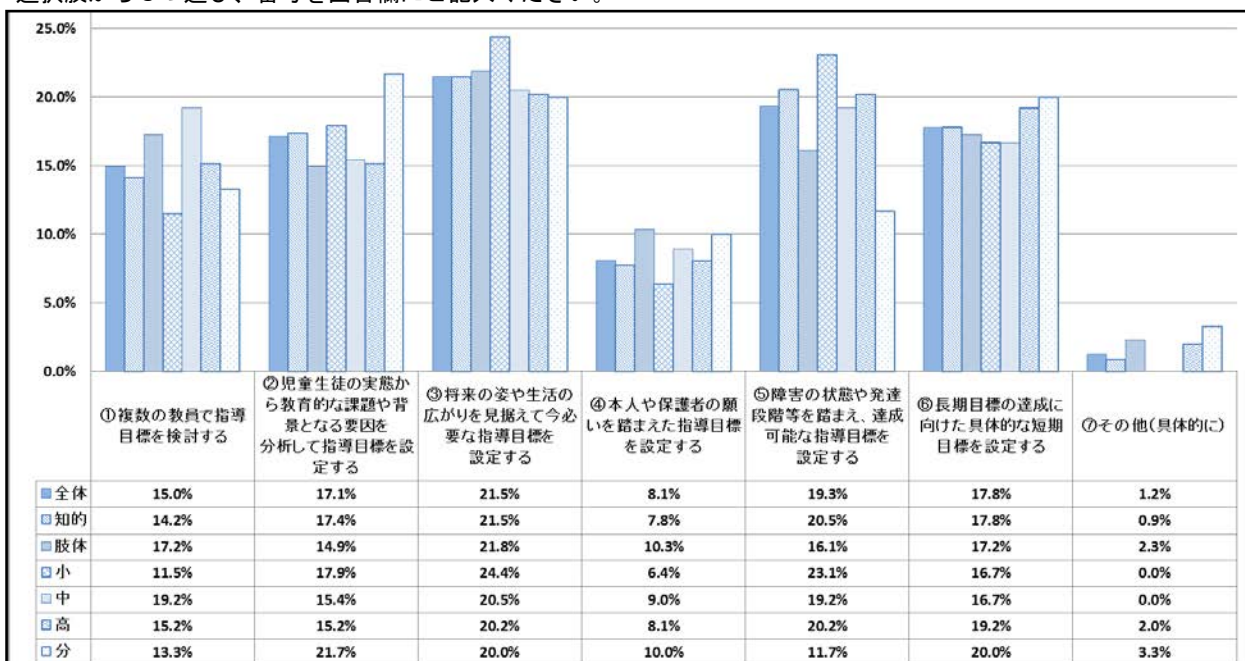
指導目標（長期・短期目標等）の設定について、特に課題と思われることを次の選択肢から3つ選び、番号を回答欄にご記入ください。



- ・全体として①「将来の姿や生活を見据えた指導目標の設定の視点が弱い」への回答が一番高く、次いで、⑥「長期目標と短期目標との関連付けを図ることが難しい」④「長期・短期目標と教科等の指導目標との関連付けが十分でない」で、③「指導目標に優先順位をつけることが難しい」も高い回答であった。
- ・その他として、「本人の実態にあった具体的な目標の設定」等の回答があった。

2 課題改善に向けて大切なこと

1で挙げた課題の改善に向けて、指導目標（長期・短期目標等）の設定について、特に大切だと考えることを次の選択肢から3つ選び、番号を回答欄にご記入ください。

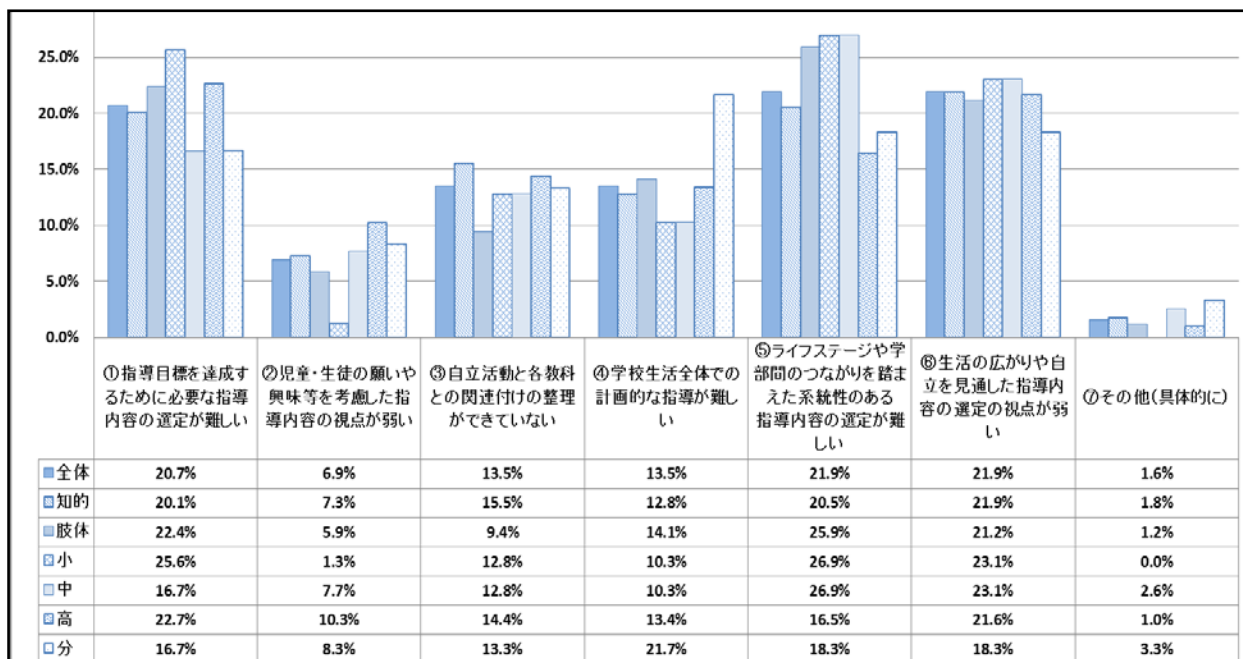


- ・全体として、③「将来の姿や生活の広がりを見据えて今必要な指導目標を設定する」への回答が一番高く、次いで⑤「障害の状態や発達段階等を踏まえ、達成可能な指導目標を設定する」⑥「長期目標の達成に向けた具体的な短期目標を設定する」であった。
- ・中学部では、①「複数の教員で指導目標を検討する」が2番目に高い回答で、分教室では、②「児童生徒の実態から教育的な課題や背景となる要因を分析して指導目標を設定する」が一番高い回答であった。
- ・その他として、「目標設定にあたっては、数値に置き換えることができない記述を認めていく」「スモールステップで考える道筋が見えていない」等の回答があった。

C 指導内容の選定

1 指導内容選定上の課題

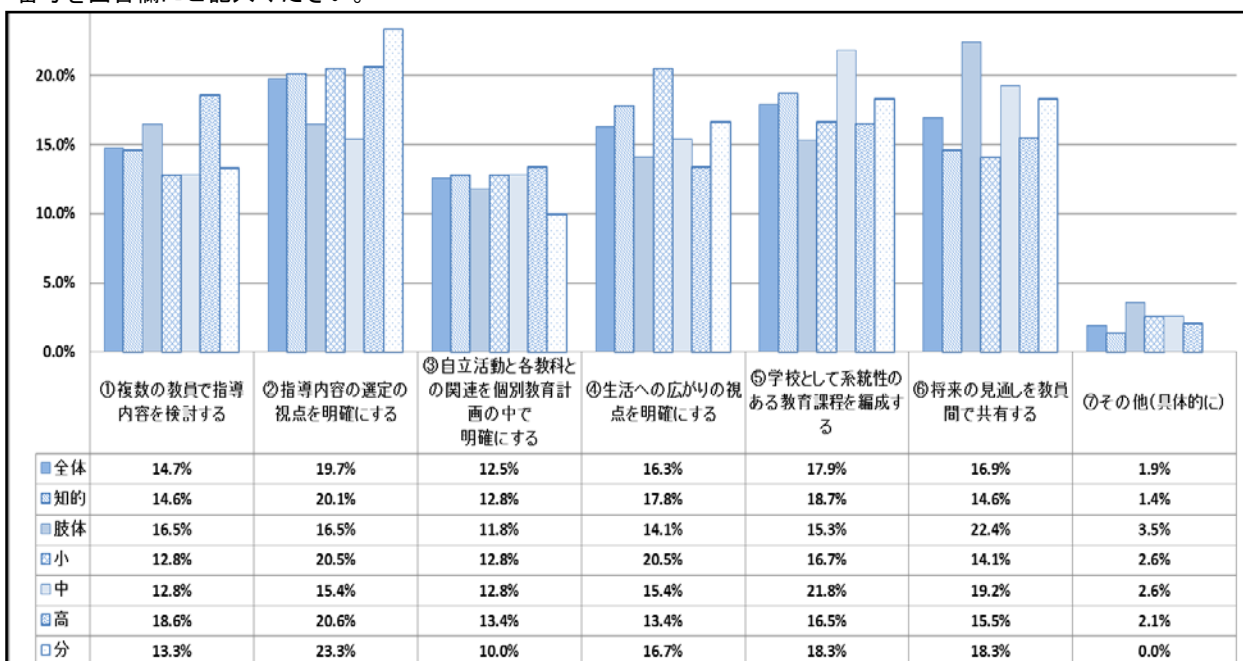
指導内容の選定について、特に課題と思われることを次の選択肢から3つ選び、番号を回答欄にご記入ください。



- ・全体として、⑤「ライフステージや学部間のつながりを踏まえた系統性のある指導内容の選定が難しい」⑥「生活の広がりや自立を見通した指導内容の選定の視点が弱い」への回答が一番高く、次いで①「指導目標を達成するために必要な指導内容の選定が難しい」であった。
- ・分教室では、④「学校生活全体での計画的な指導が難しい」への回答が一番高い。

2 課題改善に向けて大切なこと

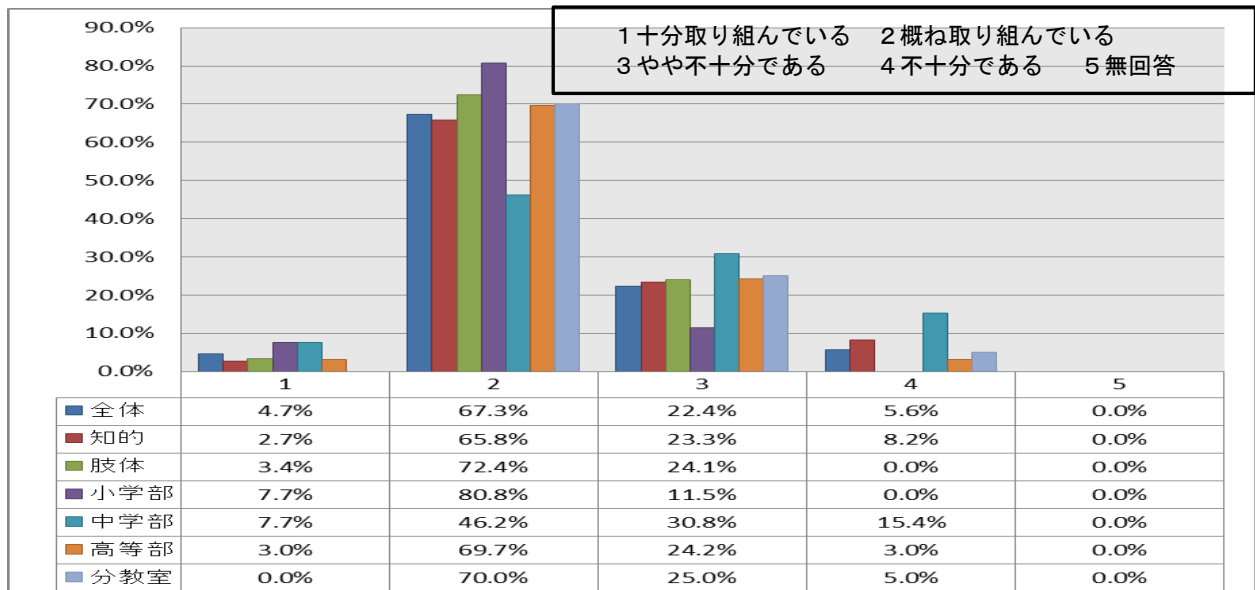
1で挙げた課題の改善に向けて、指導内容の選定について、特に大切だと考えることを次の選択肢から3つ選び、番号を回答欄にご記入ください。



- ・全体として、②「指導内容の選定の視点を明確にする」への回答が一番高く、次いで⑤「学校として系統性のある教育課程を編成する」⑥「将来の見通しを教員間で共有する」であった。
- ・小学部では、④「生活への広がりや視点を明確にする」への回答が一番高く、中学部では、⑤「学校として系統性のある教育課程を編成する」が一番高い。また、高等部では、①「複数の教員で指導内容を検討する」が、分教室では、②「指導内容の選定の視点を明確にする」が他学部に比べ高い割合となっている。
- ・その他として「何のためにこの内容を指導するのかの意識を指導者が持つ」「達成期間を意識した具体的な目標の設定」等の回答があった。

D その他

1 個別の支援計画(「支援シート I」等)の内容を踏まえて個別教育計画を作成している。

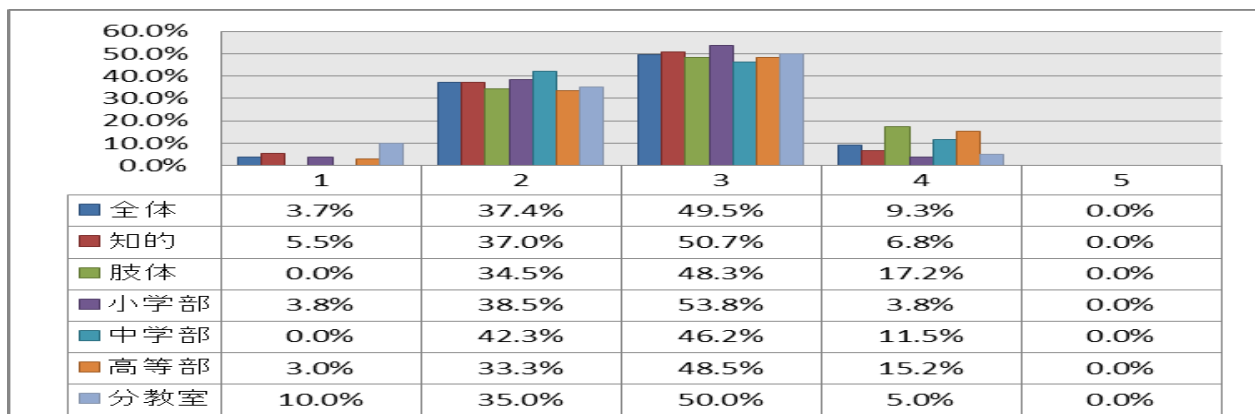


◇全体として「概ね取り組んでいる」が67.3%、「やや不十分」が22.4%、知的の中・高・分教室では、「不十分である」との回答も少数であるが見られた。

◇自由記述から見られる課題として、以下の点が挙げられた。

- ・関連付けを図ることの理解がない。教員の意識の弱さがある。
- ・個別の支援計画の内容(目標等)が十分でない。(検討されていない、計画が曖昧)
- ・共通理解のもと作成していくシステムが十分でない。
(記入の仕方や観点が教員により幅がある、進路等活用の視点で必要な内容をいかに盛り込むか)
- ・保護者、本人の意見を十分に生かすことが難しい。

2 個別教育計画作成に係る事務を効率化したり、事務負担を軽減したりする工夫をしている。



◇全体として「概ね十分である」が37.4%に対し、「やや不十分である」が49.5%と上回った。

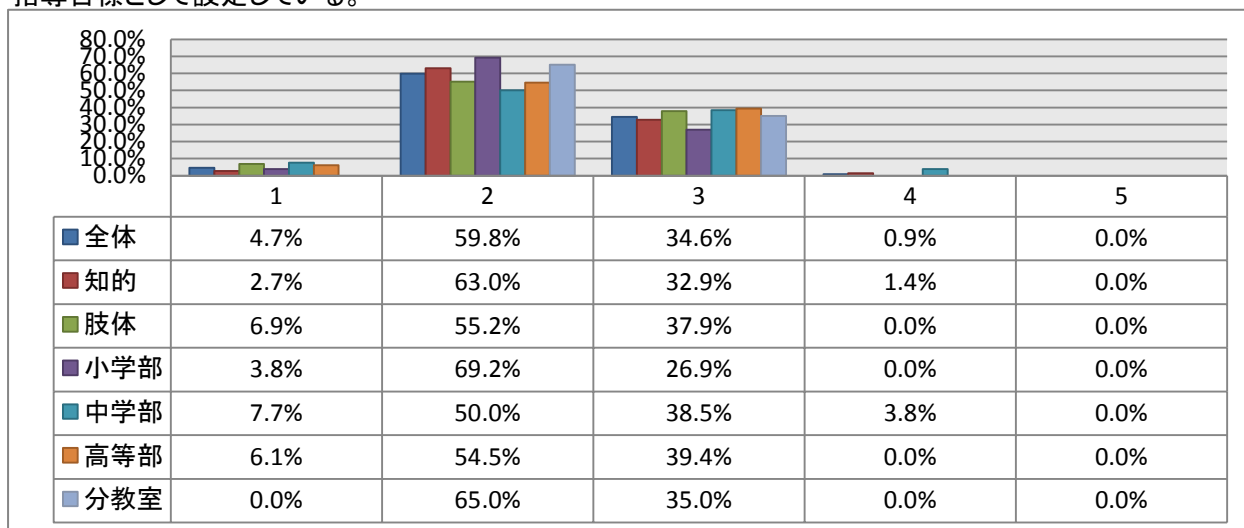
◇自由記述から見られる課題として、以下の点が挙げられた。

- ・時間がない。(作成・検討・評価)
- ・時間がかかる。
→書き方等が共通化されておらず、修正等に時間がかかる。
書式の問題(フォーマット変換や表が崩れることへの対応に時間)
記入項目内容等のスリム化が図られていない。
- ・内容についての共通理解が図られていず、日々の指導に活用されていない。
(作成で終わる、文章量が多くなり保護者等が理解しにくい)

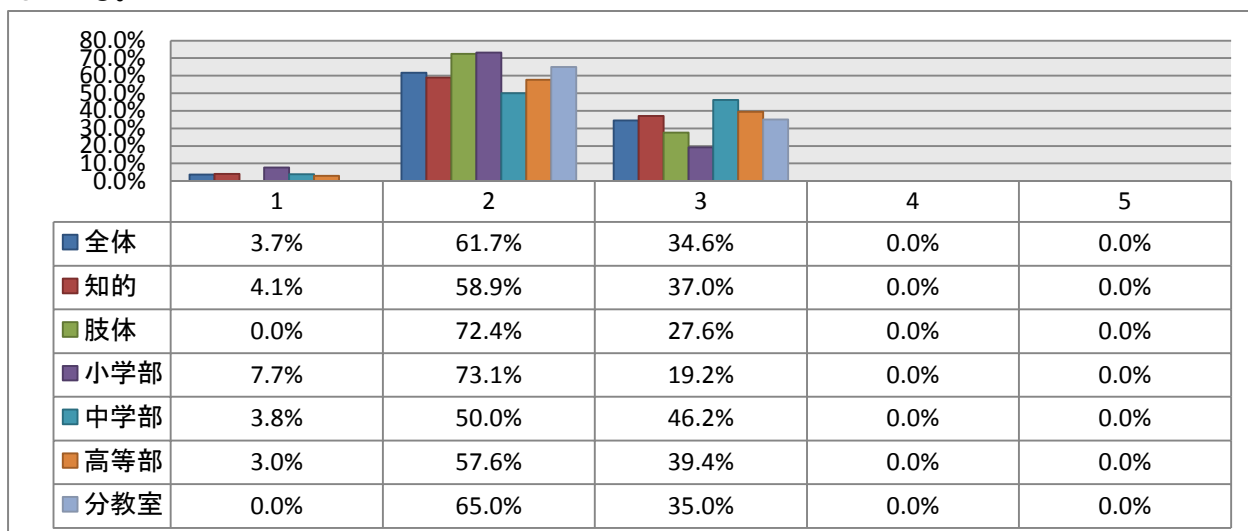
II 個別教育計画活用について

E 授業での活用

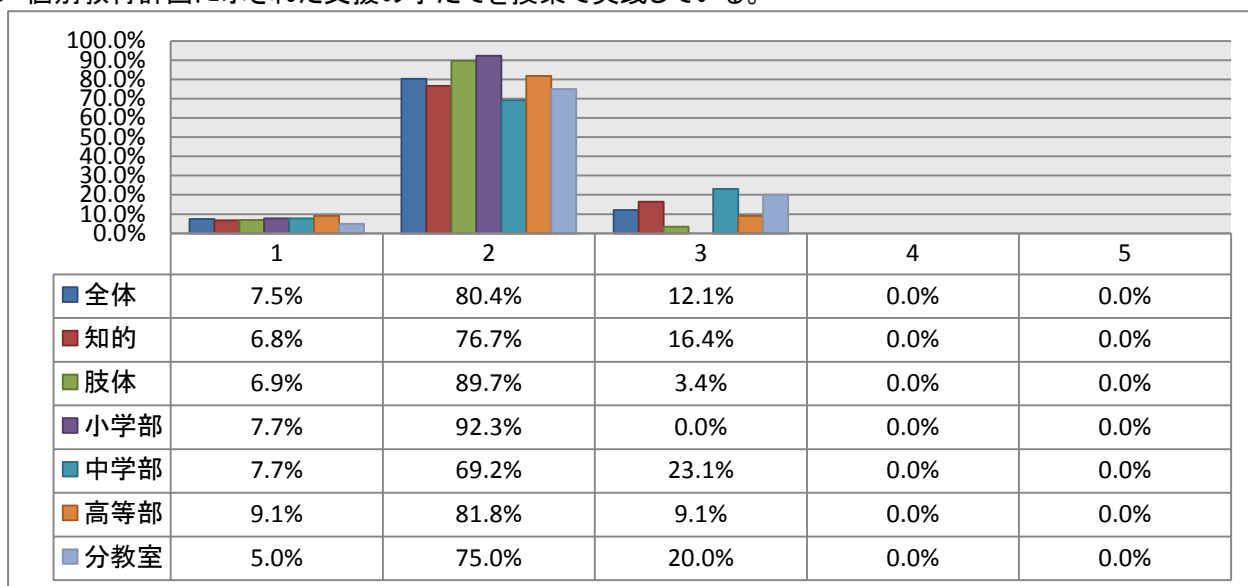
- 1 個別教育計画で設定した指導目標(長期・短期目標等)を日頃の授業と関連付け、授業の中で具体的な指導目標として設定している。



- 2 個別教育計画で設定した指導目標(長期・短期目標等)を達成するために必要な指導内容を選定し指導している。



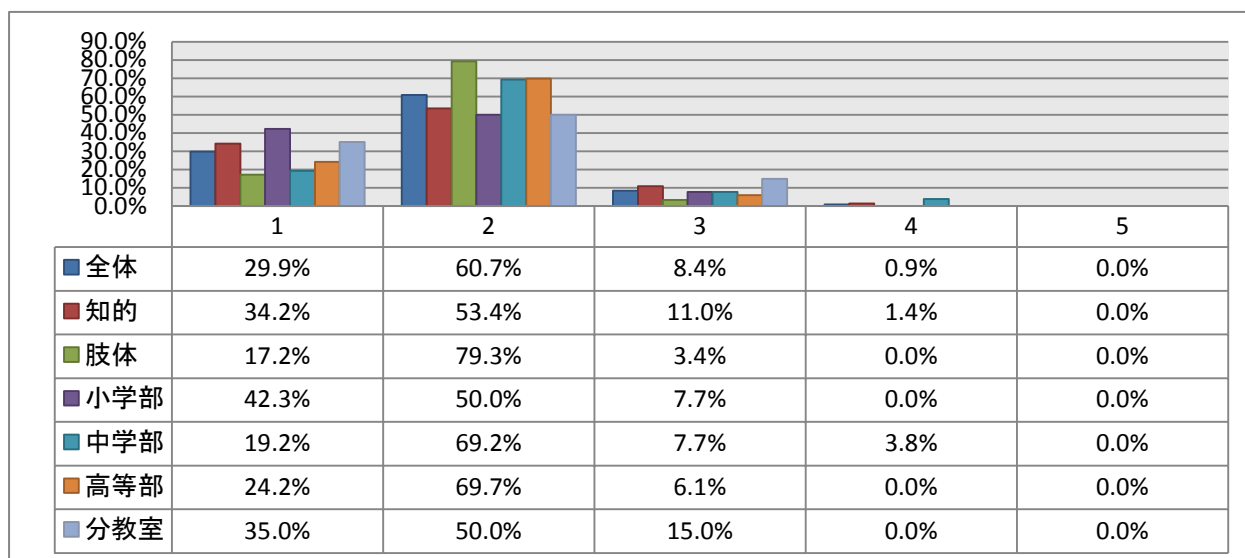
- 3 個別教育計画に示された支援の手だてを授業で実践している。



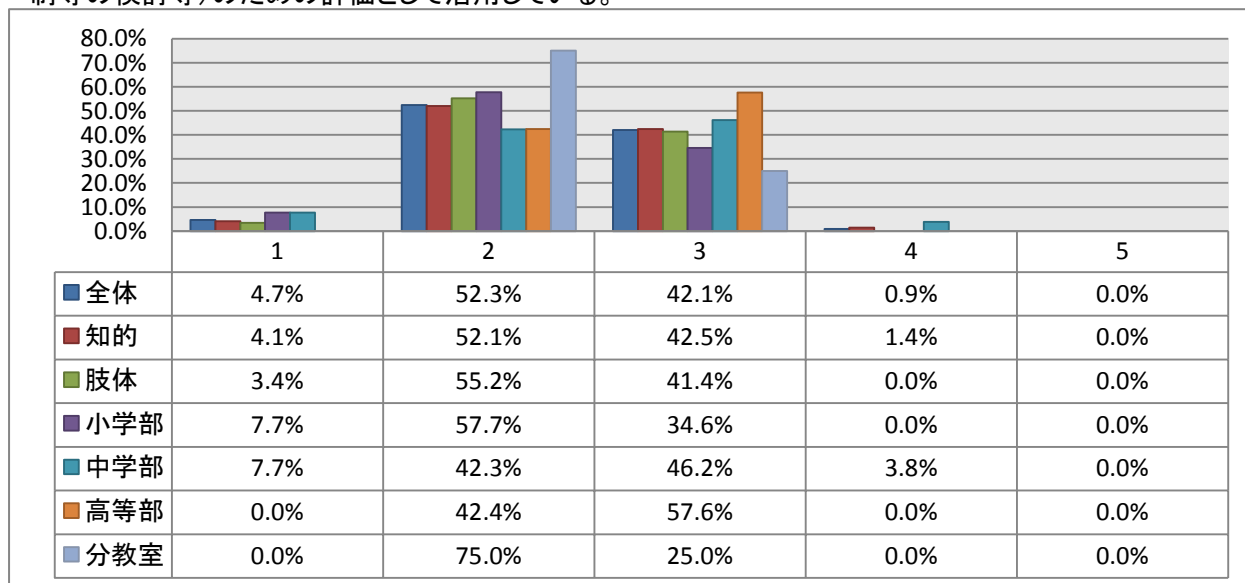
- ◇ (1) では、学部、部門の差異が少なく、全体として 34.6%が「やや不十分」と回答した。(2) では、学部によりばらつきはあるが、全体として 34.6%が「やや不十分」と回答した。(1) (2) の項目に比べ、全体として 80.4%が「概ね取り組んでいる」と回答した。
- ◇自由記述から見られる課題として、以下の点が挙げられた。
- ・全体、グループ等の授業の目標と個々の児童・生徒の目標の関連づけが難しい。
 - ・授業の単元目標と個別教育計画の目標の関連付けが明確にならない。
 - ・授業担当者が個別教育計画作成者と異なる場合の目標や手だての理解が困難。
 - ・書式が授業の内容に対応しておらず個々の目標が授業と結びつきにくい。
 - ・目標の異なる児童・生徒に対応する授業作りが困難。
 - ・授業内容、題材の選定理由、課題等の共通理解が不十分。

F 評価の活用

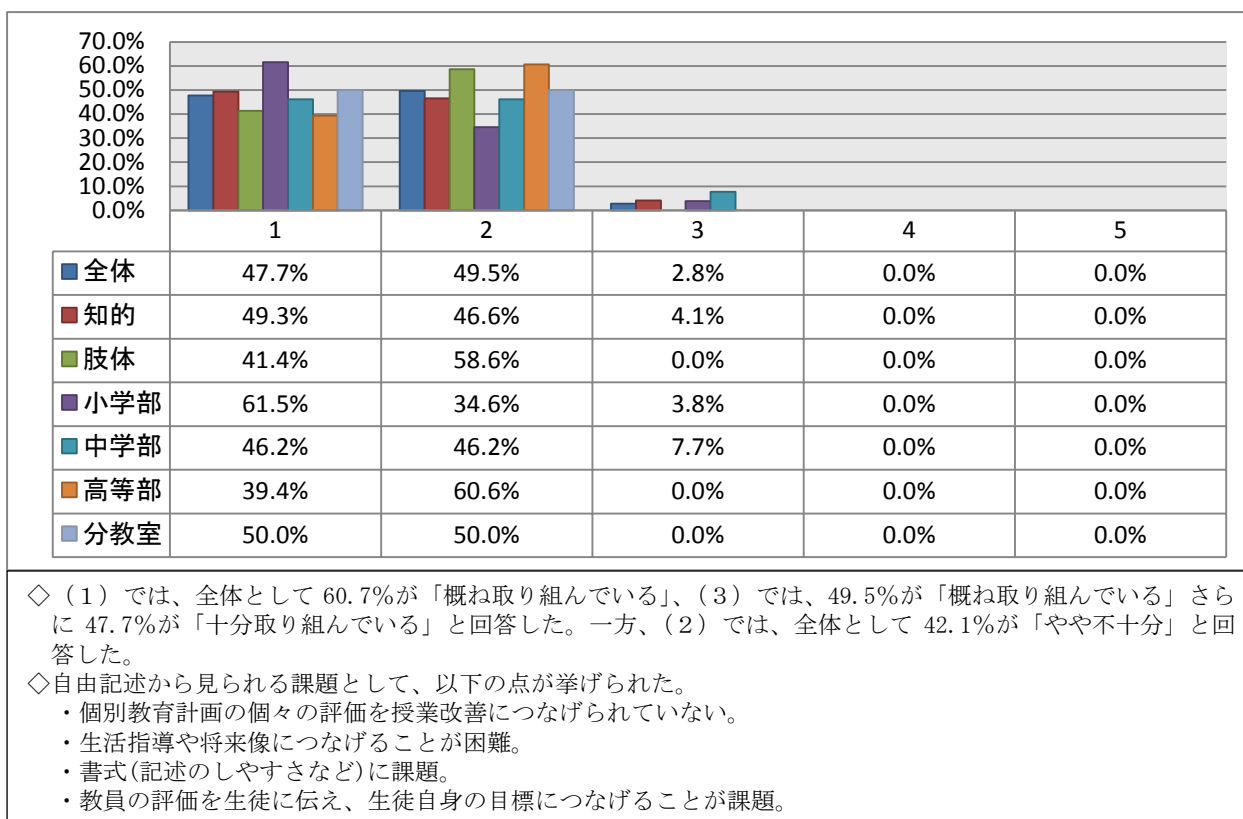
1 個別教育計画における学習の評価は、個別教育計画で設定した指導目標に対して、評価している。



2 個別教育計画における学習の評価を、授業改善(指導目標、指導内容、支援の手だての見直しや指導体制等の検討等)のための評価として活用している。

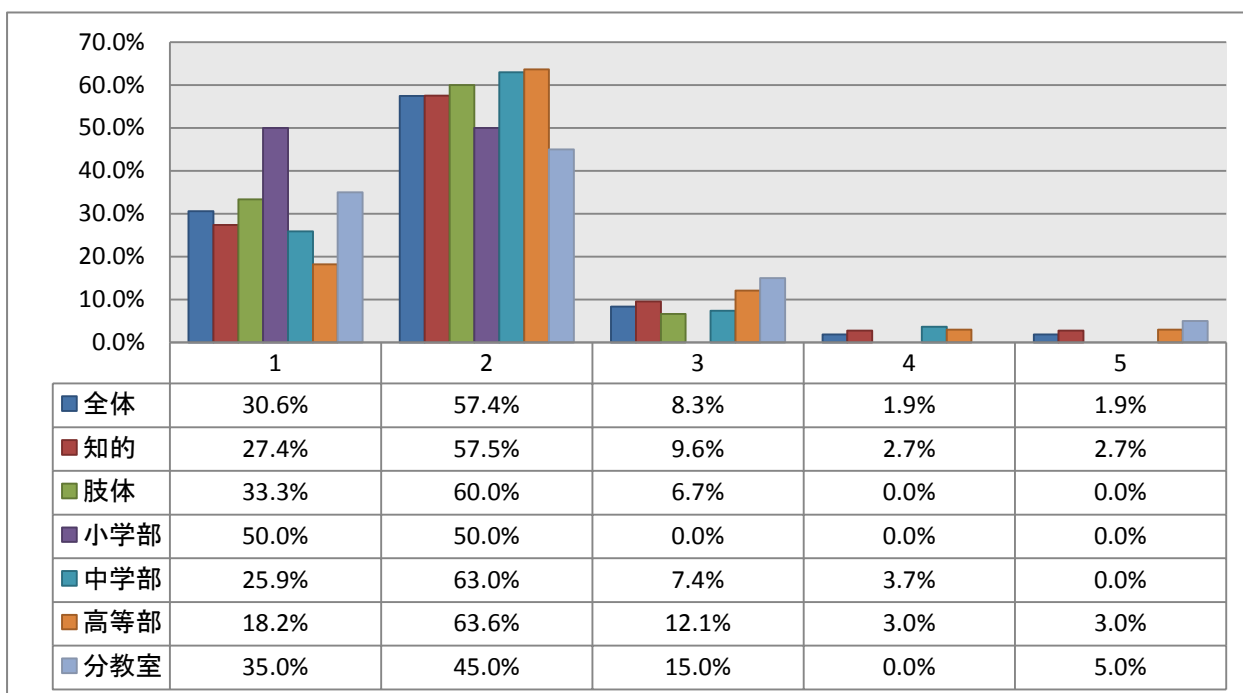


3 個別教育計画における学習の評価を、保護者に通知する評価として活用している。

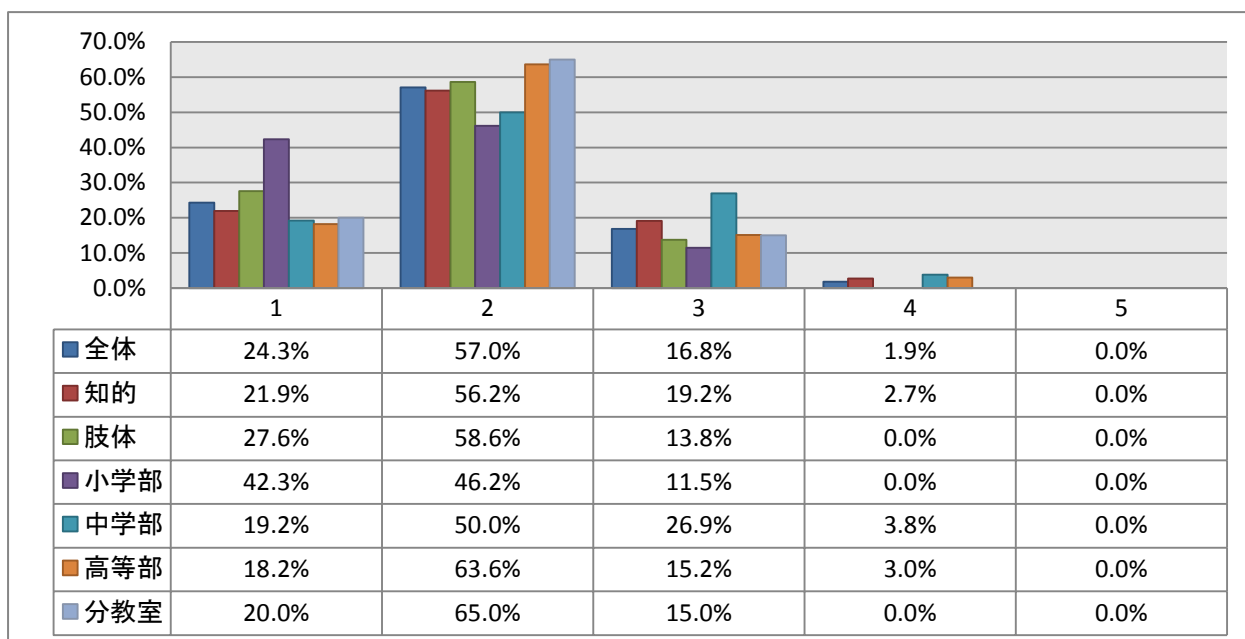


G 教員間の連携

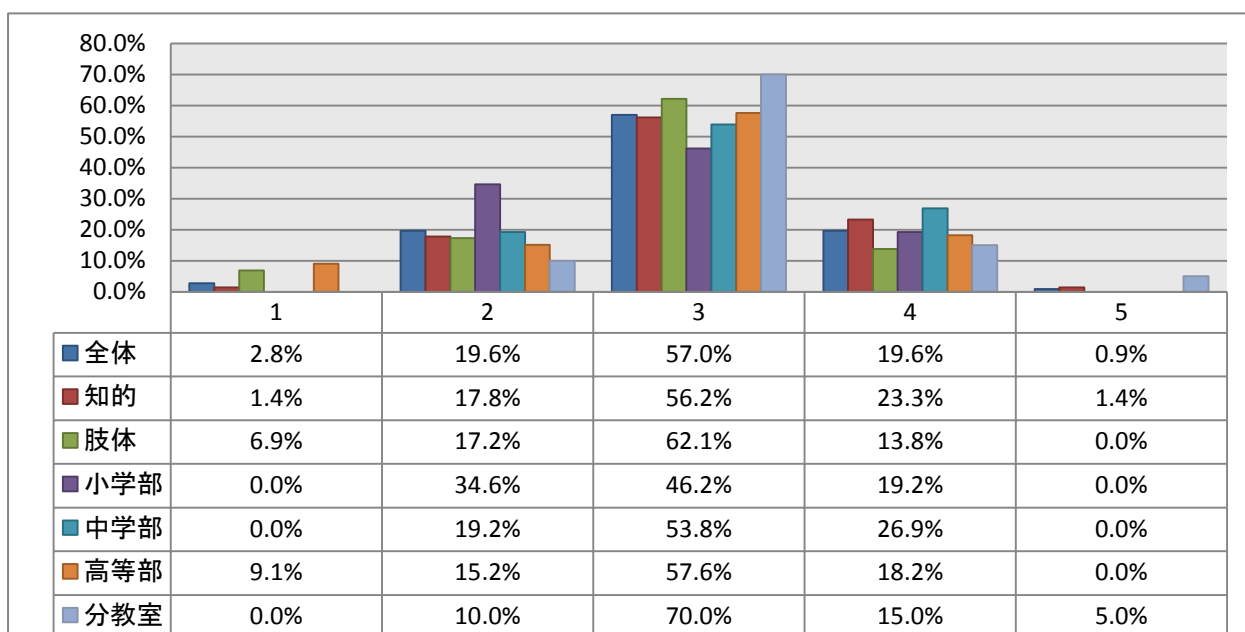
1 個別教育計画の作成に当たり、指導に関わる複数の教員で児童・生徒の実態、目標、支援の手だて等検討する機会をもち、指導の方向性を共有している。



2 個別教育計画の評価に客観性を持たせたり、児童・生徒の学びの質を多角的に理解したりするために、指導に関わった複数の教員で評価を検討している。



3 << 専門職又は看護師が配置されている学校のみ >> 個別教育計画の作成に専門職 (PT、OT、ST、心理職) や看護師が参加している。



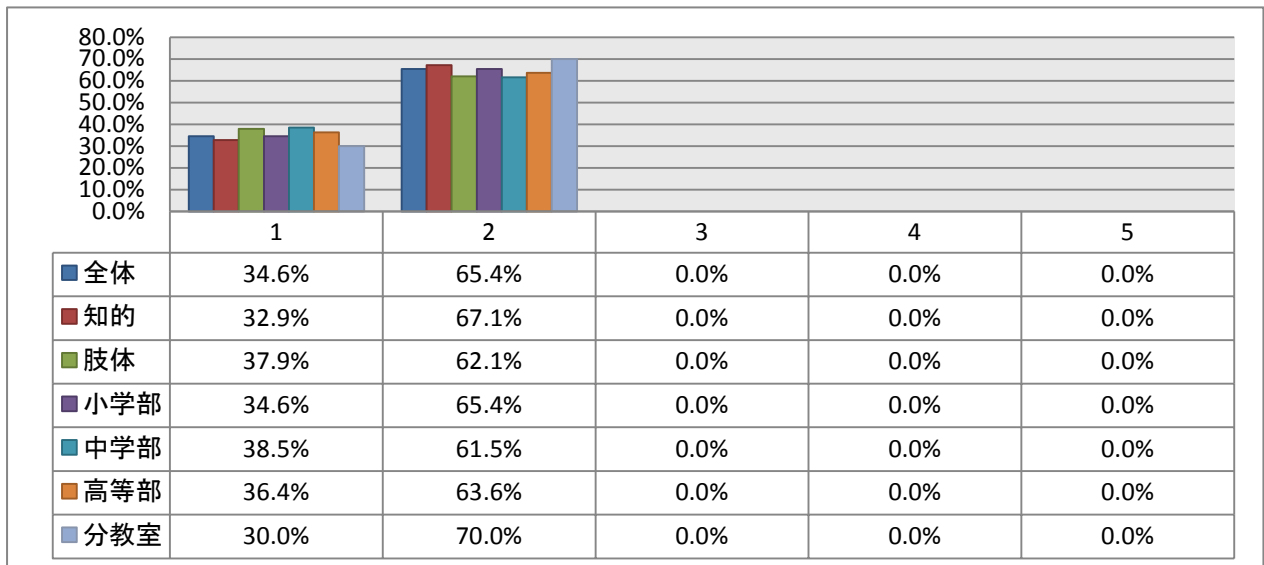
◇ (1) では、全体として、57.4%が「概ね取り組んでいる」と回答した。(2) では、57.0%が「概ね取り組んでいる」と回答した。一方で、(3) は、57.0%が「やや不十分」と回答した。

◇ 自由記述から見られる課題として、以下の点が挙げられた。

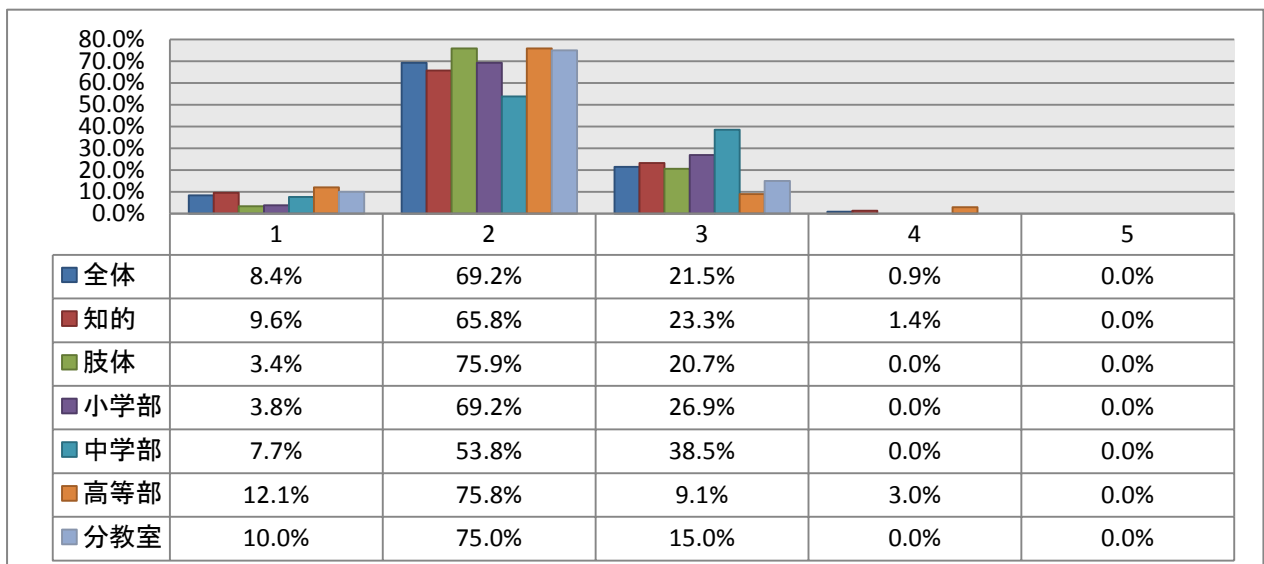
- ・話し合いの時間の確保。
- ・クラス外の教員との連携(学年、学部など)。
- ・専門職の活用に関するシステムが不十分。
- ・作成時のみの話し合いとなり、日々の活用は意識が薄い。

H 保護者との連携

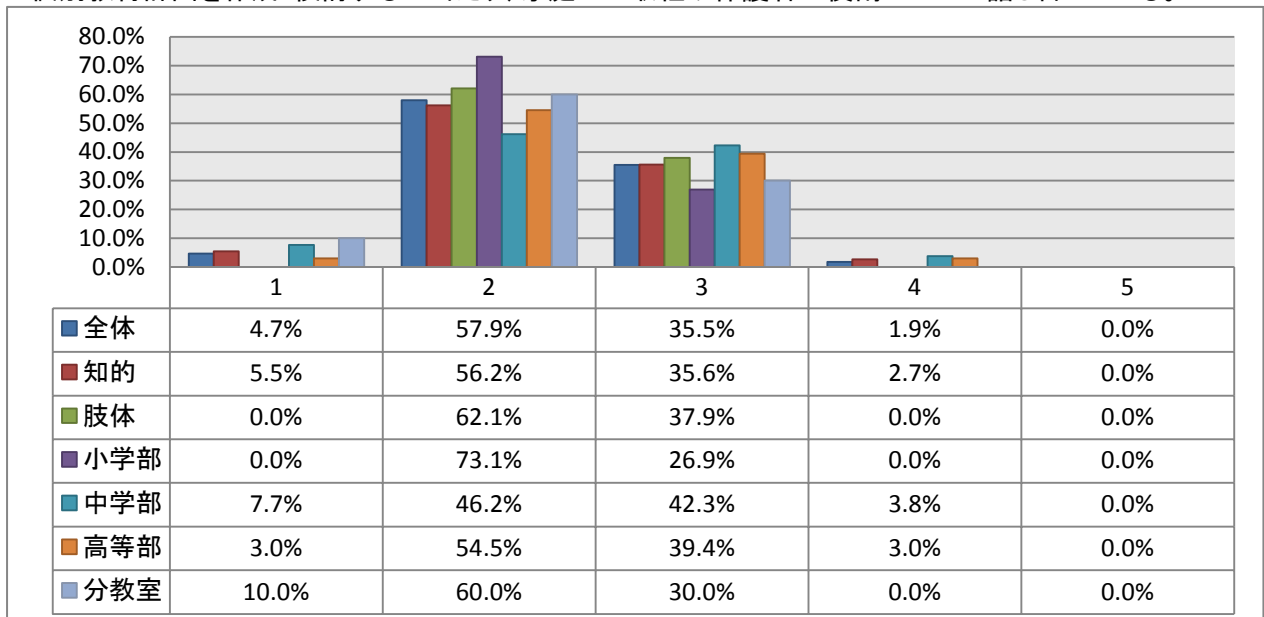
1 個別教育計画の内容(児童・生徒の実態や目標・指導内容等)を説明し、理解を得ている。



2 保護者と教員の間で、児童・生徒の将来像について共有している。



3 個別教育計画を作成・検討するに当たり、家庭での取組や保護者の役割について話し合っている。



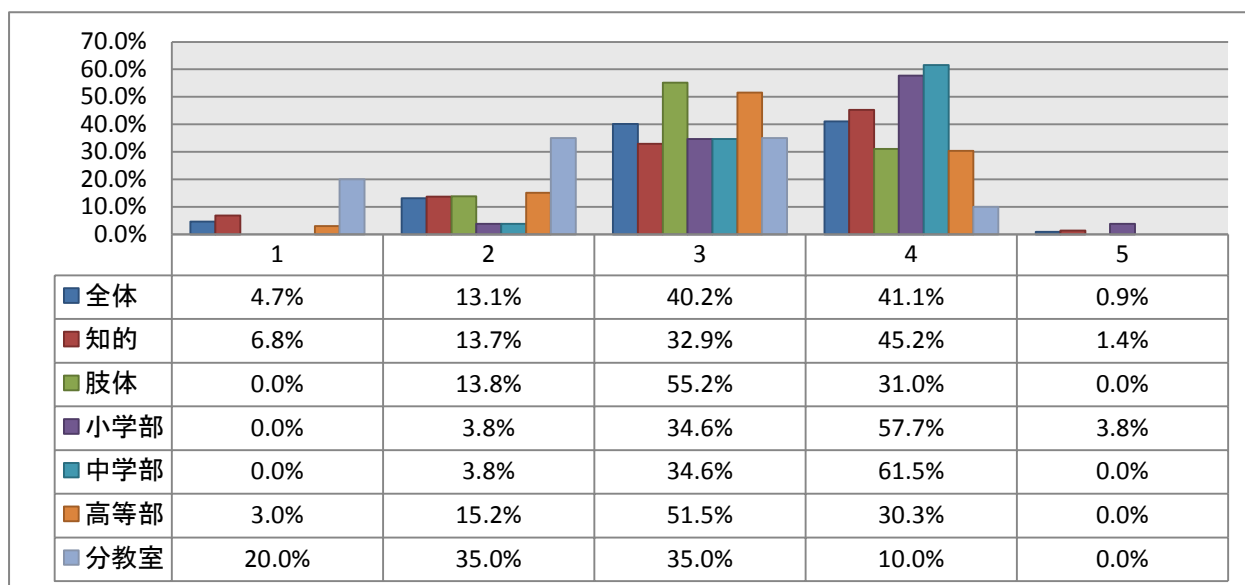
◇ (1) では、「やや不十分」「不十分」の回答は見られなかった。(2) では、「概ね取り組んでいる」が 69.2% (3) では、「概ね取り組んでいる」が 57.9%であるが、G 教員の連携に比べ「やや不十分」の割合が少々高く、(3) では、35.5%が「やや不十分」としている。

◇自由記述から見られる課題として、以下の点が挙げられた。

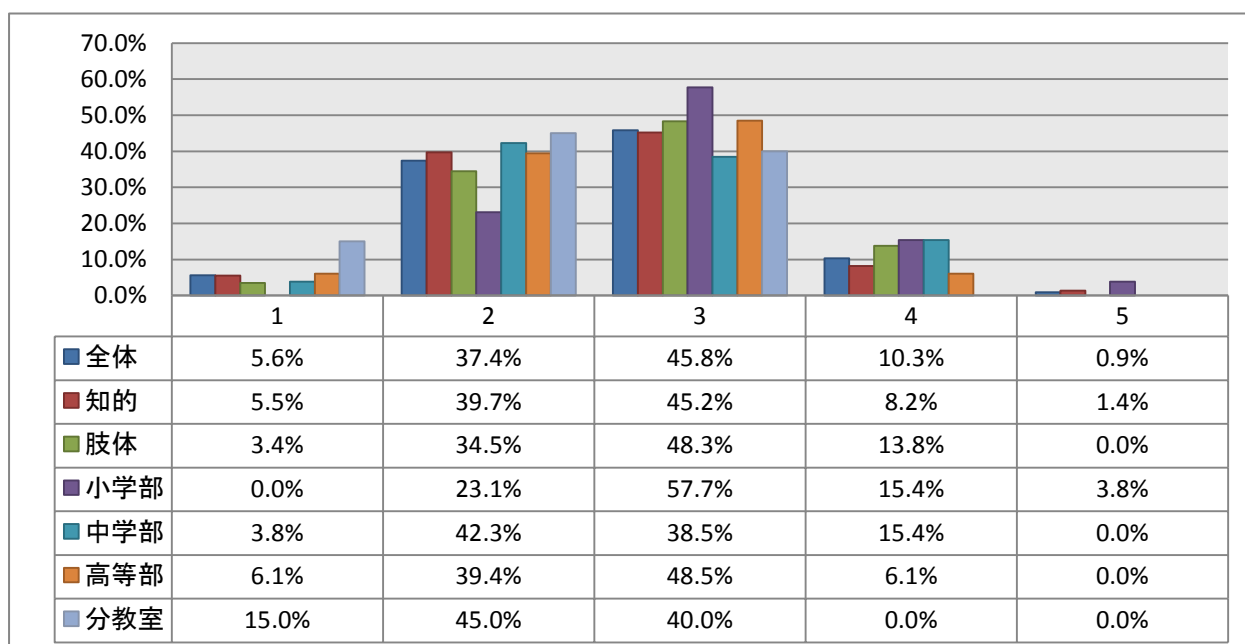
- ・家庭状況により、個別教育計画の内容の理解が困難であったり、家庭での取組が困難であったりする。
- ・家庭と学校とで実態把握や目標・将来像が異なり共通理解が難しい。
- ・将来像をイメージできないため、個別教育計画に反映されない。
- ・共通理解のための時間が不足。
- ・学校と家庭での取組の違い。

I 本人の参加

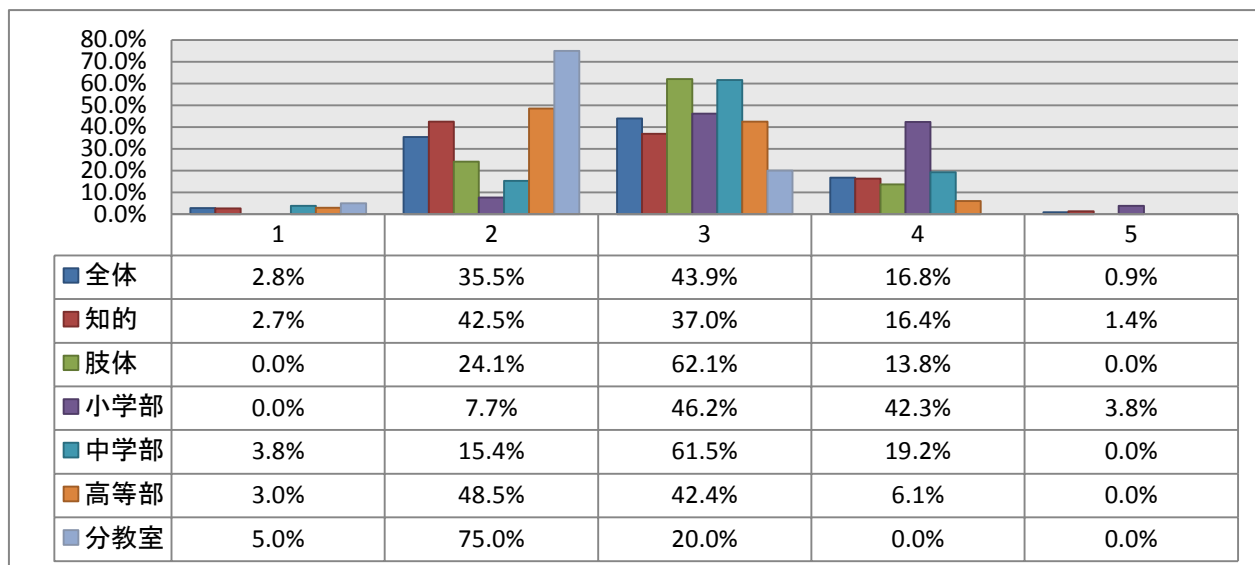
1 児童・生徒にわかるように個別教育計画の内容を知らせている。



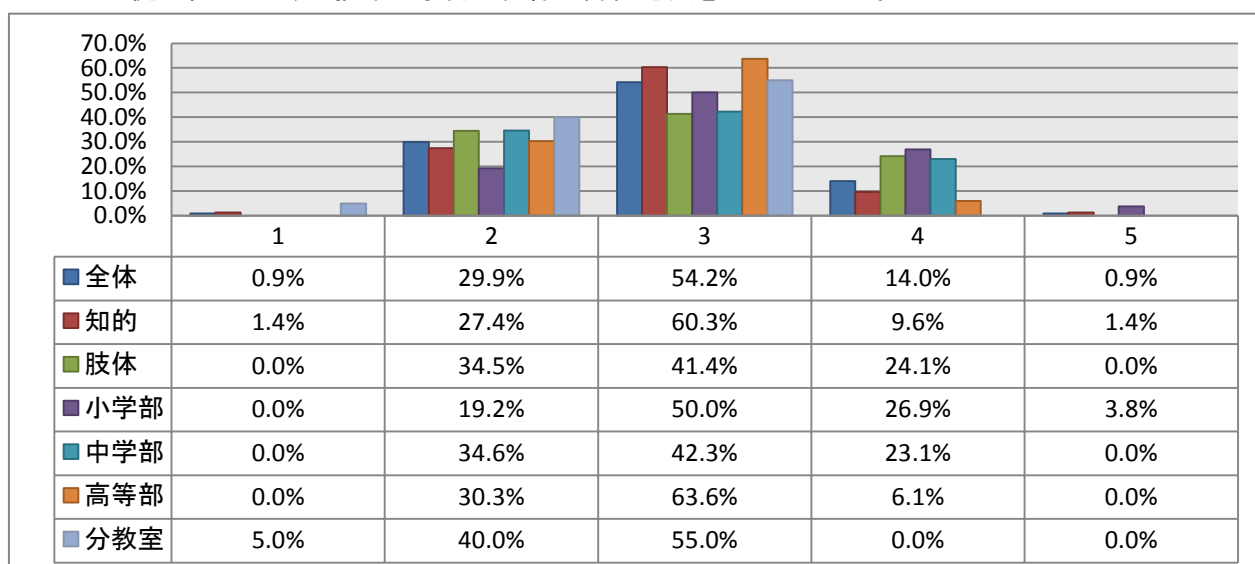
2 児童・生徒に学習の目的や意義を伝えて授業を行っている。



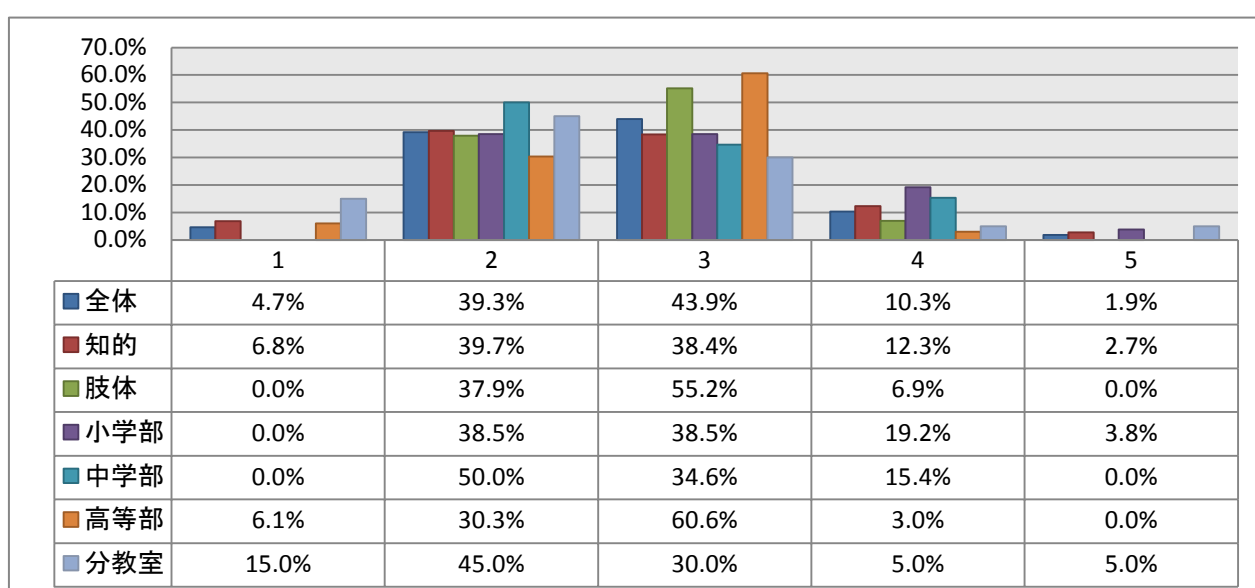
3 児童・生徒に今行っている学習が他の学習や生活にどういかなされるかを説明している。



4 児童・生徒にわかるように授業で学習の目標や評価方法を知らせている。



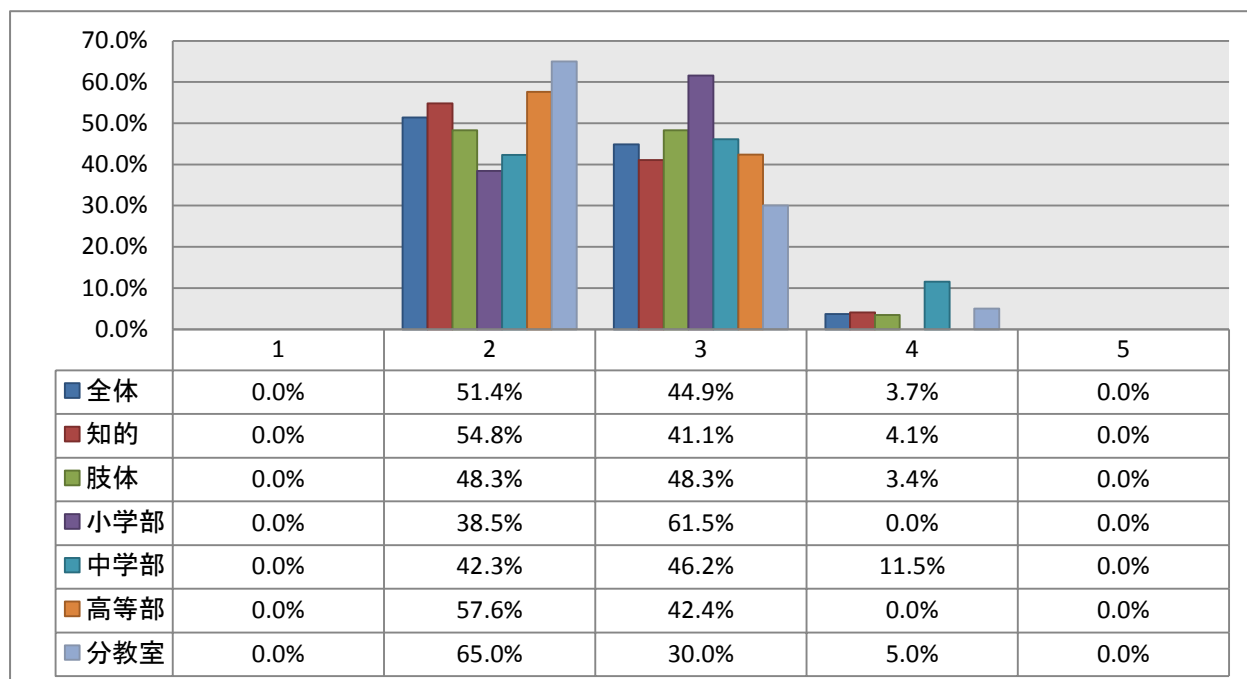
5 児童・生徒に学習の成果(評価の結果)を知らせている。



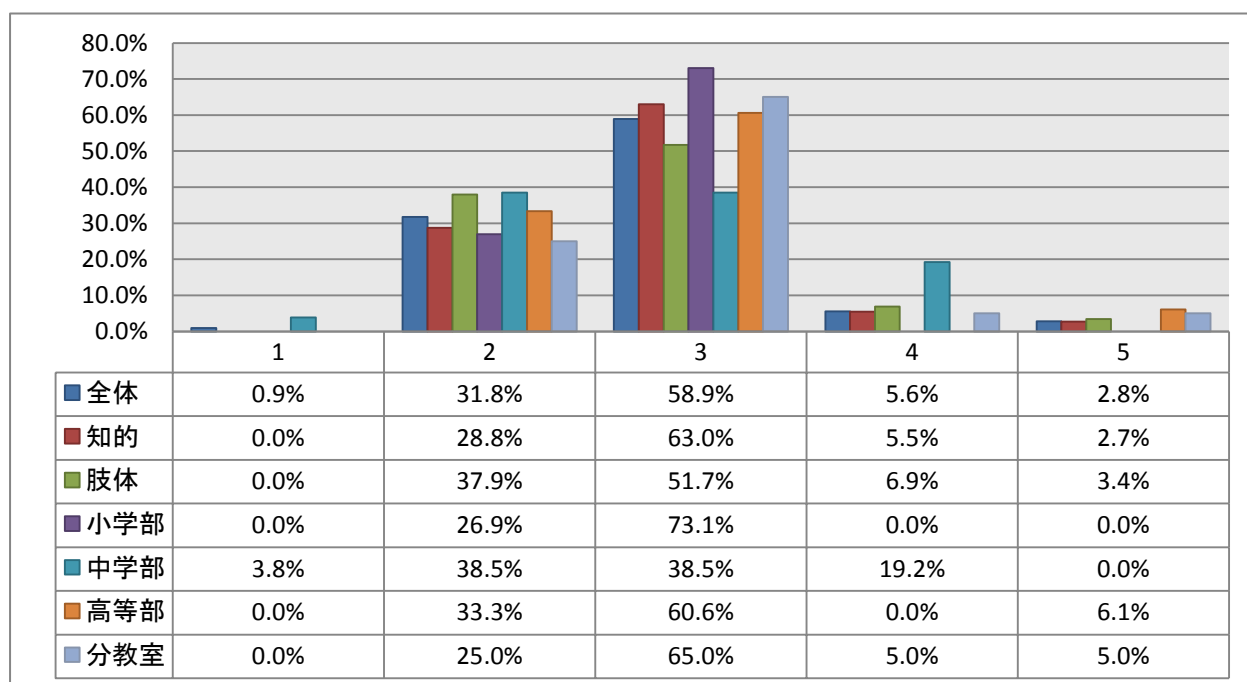
- ◇ (1) ~ (5) 共通して「やや不十分」、「不十分」としての回答が高い。
- ◇ 自由記述から見られる課題として、以下の点が挙げられた。
 - ・児童生徒がわかるように伝えるには難しい。
 - ・提示の機会がない、伝え方が不十分。
 - ・教員が本人参加という意識を持っていない。
 - ・必要性があるため、本人がわかる方法を検討していく。

J 教育課程の見直し

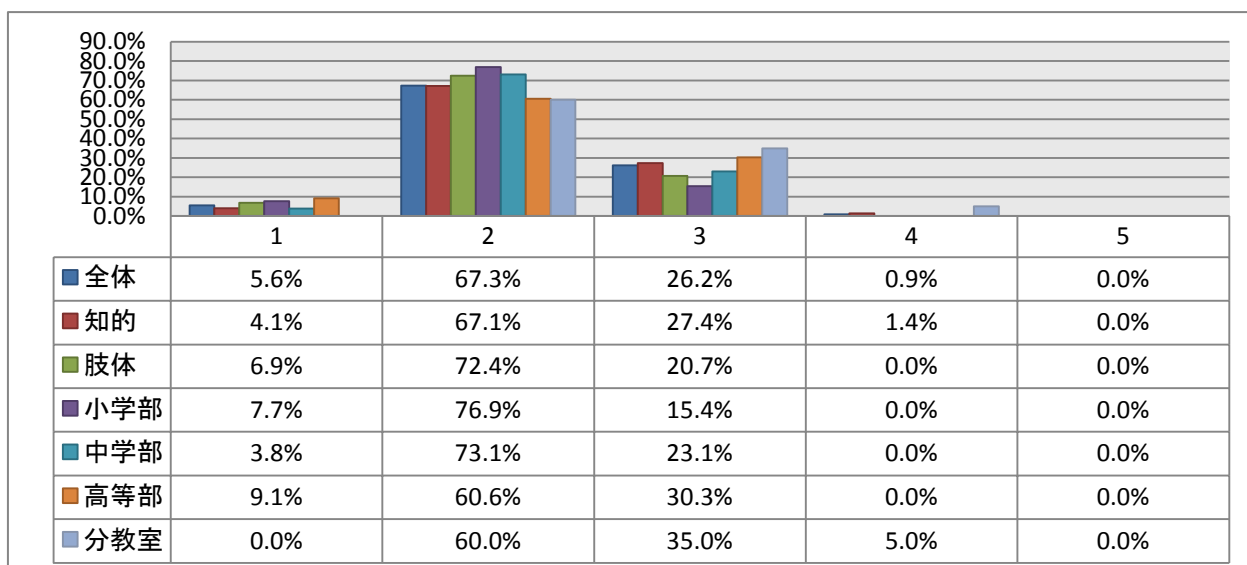
1 学校として、系統性のある教育課程を編成している。



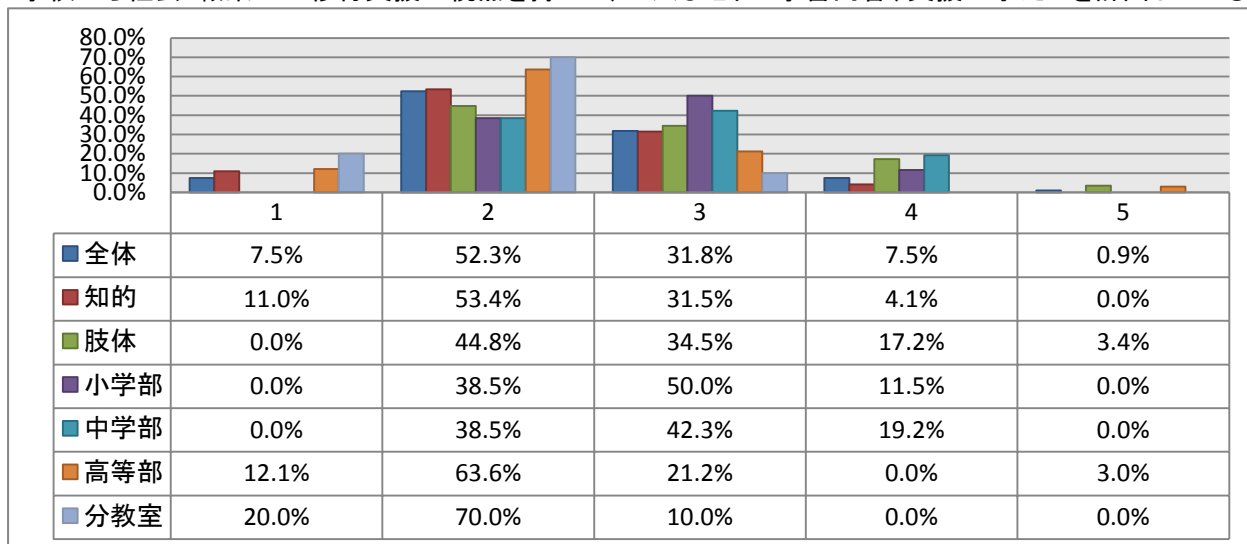
2 学部間の指導の系統性を理解して指導している。



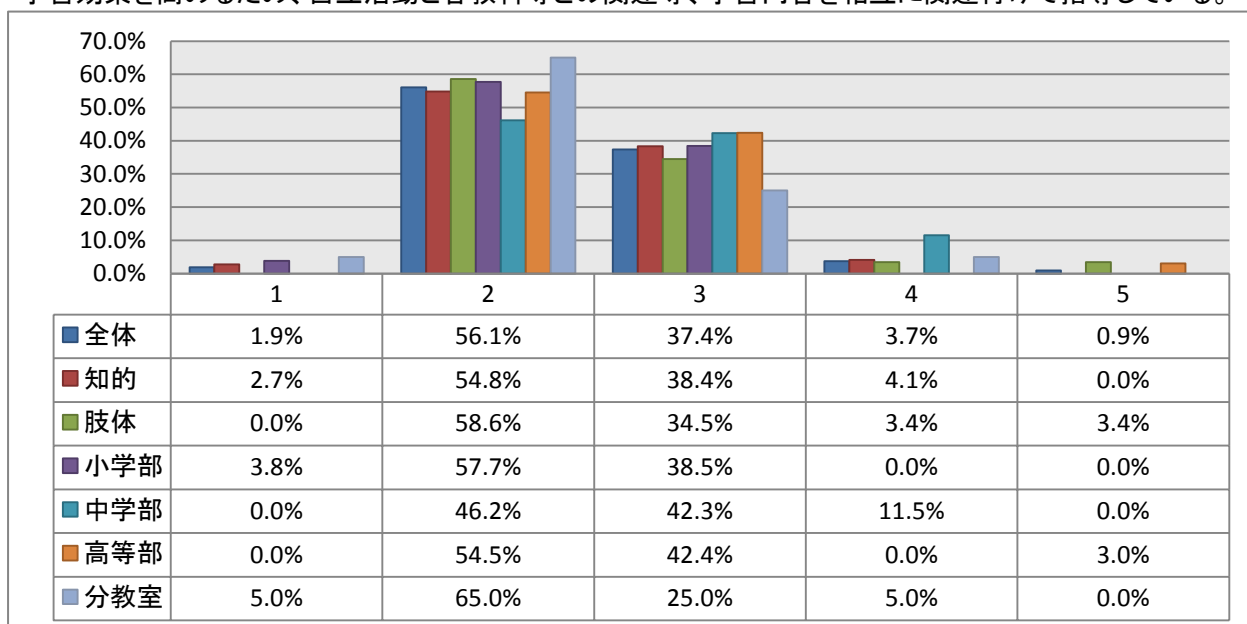
3 入学、進級に当たり、それまでの学習とのつながりを意識した個別教育計画を作成している。



4 学校から社会・職業への移行支援の視点を持って、一人ひとりの学習内容、支援の手だてを計画している。



5 学習効果をもとめるため、自立活動と各教科等との関連等、学習内容を相互に関連付けて指導している。



◇(1)は、「概ね取り組んでいる」と「やや不十分」「不十分」がほぼ半々で、小学部では、「やや不十分」が61.5%と「概ね取り組んでいる」を上回っている。

(2)は、「やや不十分」の回答が高く、特に小学部では、73.1%である。

(3)は他の項目に比べ「概ね取り組んでいる」が67.3%と高いが、高等部、分教室は30%以上が「やや不十分」と回答している。(4)(5)は全体として、「やや不十分」が40%程度あり、(4)では高等部、分教室に比べ、小・中学部の「やや不十分」の回答が高い。

◇自由記述から見られる課題として、以下の点が挙げられた。

- ・学部間の指導の系統性の弱さ。
- ・キャリア教育の視点をふまえた教育課程づくり。
- ・教員間で、検討・共有する時間設定の難しさや人員の不足。
- ・教育課程に関する意識や理解の浅さ。
- ・児童生徒数の増加による学校施設や設備の不足による、教育課程編成の制約。
- ・引き継ぎの時間の設定や方法に関すること。
- ・将来像のイメージの持ちにくさ。
- ・各教科の指導計画が担当教員個人によって作成されること。
- ・学部間の共通理解の難しさ。
- ・個別教育計画との結びつきの弱さ。

参考文献

- 神奈川県教育委員会 2005 支援が必要な子どものための『個別の支援計画』～『支援シート』を活用した「関係者の連携」の推進～改訂版
<http://www.pref.kanagawa.jp/uploaded/attachment/611827.pdf> (URLは2016年7月取得)
- 神奈川県教育委員会 2010 協働支援チーム宣言～自立活動教諭(専門職)とのチームアプローチによる支援が必要な子どもの教育の充実～
<http://www.pref.kanagawa.jp/uploaded/attachment/172868.pdf> (URLは2016年7月取得)
- 海津亜希子 2012 『個別の指導計画作成ハンドブックーLD等、学習のつまずきへのハイクオリティな支援』日本文化科学社
- 香川邦生 2015 『分かりやすい「自立活動」領域の捉え方と実践』教育出版
- 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所 2015 『特別支援教育の基礎・基本』ジエース教育新社
- 宮崎英憲 2012 『<特別支援教育>個別の指導計画を生かした学習指導案づくり』明治図書
- 花田成孝 2015 「個別教育計画活用における保護者との連携ー連携の場に有効なツールの導入を通してー」(神奈川県立総合教育センター『長期研究員研究報告第14集』)
- 窪田朗子・羽賀晃代 2015 「個別教育計画を活用した指導の充実に関する研究」(神奈川県立総合教育センター『平成27年度研究集録第35集』)

『個別教育計画を活用した指導の充実に関する研究』の作成関係者

<助言者>

所 属	職 名	氏 名	備 考
横浜国立大学	教 授	渡部 匡隆	平成 26・27 年度

<調査研究協力員>

所 属	職 名	氏 名	備 考
神奈川県立武山養護学校	総括教諭	小川 明夫	平成 26・27 年度
神奈川県立中原養護学校	総括教諭	岡安 玲	平成 26・27 年度
神奈川県立高津養護学校	総括教諭	樋笠 晴美	平成 26 年度
神奈川県立高津養護学校	総括教諭	菅原 眞	平成 27 年度
神奈川県立鶴見養護学校	教諭	秋山 真弓	平成 26 年度
神奈川県立鶴見養護学校	総括教諭	村上 知之	平成 27 年度
特別支援教育課	指導主事	角 玲子	平成 26・27 年度

<神奈川県立総合教育センター>

所 属	職 名	氏 名
特別支援教育推進課	特別支援教育推進課長	福田 裕志
特別支援教育推進課	主幹兼指導主事	篠原 朋子
特別支援教育推進課	指導主事	羽賀 晃代
特別支援教育推進課	指導主事	窪田 朗子
特別支援教育推進課	指導主事	豊岡 裕子
特別支援教育推進課	指導主事	関野 大輔
特別支援教育推進課	指導担当主事	横澤 美保
特別支援教育推進課	教育指導専門員	佐藤 隆広
特別支援教育推進課	教育心理相談員	石田 望
特別支援教育推進課	教育心理相談員	網野 智章
特別支援教育推進課	教育心理相談員	武山 花野
特別支援教育推進課	教育心理相談員	筒井 友絵
茅ヶ崎養護学校	教諭（長期研究員）	花田 成孝

個別教育計画活用ケースブック



発行 平成 28 年 8 月

発行所 神奈川県立総合教育センター

〒251-0871 藤沢市亀井野 2 5 4 7 - 4

電話 (0466)81-1582 (特別支援教育推進課 直通)

※本冊子については、ホームページで閲覧できます。

再生紙を使用しています



神奈川県立総合教育センター

善行庁舎
〒251-0871 藤沢市善行 7-1-1
TEL (0466) 81-0188
FAX (0466) 84-2040

ホームページ <http://www.edu-ctr.pret.kanagawa.jp/>

亀井野庁舎（教育相談センター）
〒252-0813 藤沢市亀井野 2547-4
TEL (0466) 81-8521
FAX (0466) 83-4500

